

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要13



[於紅ヶ谷地区・竹田地区・出土谷地区]

2003年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要13



[於紅ヶ谷地区・竹田地区・出土谷地区]

2003年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

# 序

第17回ユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」は、過去から引き継がれてきた人類の宝物を未来の世代に引き継いでいくことを目的とするものです。

とりわけ、世界遺産リストに登録された遺産は、「顕著な普遍的価値 (outstanding universal value)」を有し、国際社会全体が保護のために協力していくことが求められます。

当市の石見銀山遺跡は、国から世界遺産に登録されるに適當な物件として、平成13年4月、国の暫定リストに登載されました。本登録へ向け、地権者の皆様を始めとする多くの方々からご協力やお励ましを賜っております。このことは、遺跡保全の最前线にあります行政組織として何よりも心強く、今後ますますのご協力とご理解をお願い申し上げる次第です。

「遺跡と共に生きる」ためには、まず遺跡の持つ「価値」をより多くの方々に知っていただくことが重要で、そのためには基礎的な調査の継続が必要と考えます。

遺跡を顕在化するための基礎調査である石見銀山遺跡総合調査は、ようやく7年を経過いたしました。今、これらの調査成果を紹介し、遺跡の持つ価値をより明らかにしていくことは調査担当機関の大切な責務の一つであります。

その観点に立って発刊いたしました本書は、発掘調査の成果を記したものでございます。調査に際してご協力をいただきました同和鉱業株式会社を始めとする土地所有者各位、また関係の各機関に衷心より御礼申し上げ、本書が今後の遺跡調査研究に資すれば甚だ幸いでございます。

大田市教育委員会  
教育長 松 本 陽 三

# 例 言

1. 本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となり、島根県教育委員会の協力を得て実施した。
3. 本書の内容は、平成12~14年度の調査成果のうち、於紅ヶ谷地区（平成14年度）、竹田地区（平成14年度）、出土谷地区（平成12~14年度）についての概要をまとめたものである。
4. 調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査整備委員会〕 平成14年8月、石見銀山遺跡発掘調査委員会から改組

田中 琢（前奈良国立文化財研究所所長） 田中圭一（元群馬女子大学大学教授）

田中義昭（元島根大学教授） 駒田晴子（滋賀県立大学教授）

藤岡大拙（島根県立女子短期大学学長）

澤田谷和（同和鉱業㈱コーポレイトスタッフ総務・法務部門部長 平成12年度）

畠本晴隆（同和鉱業㈱コーポレイトスタッフ総務・法務部門部長 平成12~13年度）

渡辺哲雄（同和鉱業㈱執行役員コーポレイトスタッフ総務・法務部門部長 平成13年度）

末澤和政（同和鉱業㈱取締役コーポレイトスタッフ）

青柳正規（東京大学教授）

斎藤英俊（東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター長）

高橋美也子（サンレディ大田館長）

牛川喜幸（京都橘女子大学教授）

村上 隆（奈良文化財研究所主任研究官）

熊谷國彦（島根県大田市長） 安田増憲（島根県温泉津町長）

池龜 貴（島根県仁摩町長）

井上勝博（島根県教育委員会教育次長 平成12~13年度）

勝部 昭（島根県教育委員会教育次長）

〔事務局〕

島根県大田市教育委員会 文化振興室

〔調査員〕

大田市教育委員会 大國晴雄、遠藤浩巳、中田健一

島根県教育委員会 烏谷芳雄、守岡正司（平成12~13年度）

〔調査補助〕坂根健悦、松尾賢二、今岡司郎（平成13年度）

〔遺物整理〕中川英子、高村玲子、涌井菜子、太田洋子、湯川 登、岩谷和樹、尾村 勝、松田洋子

浅野美貴、井上伸子、鹿毛 靖、川上悦子、島林 慶、清水美智子、田平祐子

松浦恵里子、森山和子、山平さおり

〔調査指導〕

文化庁記念物課 独立行政法人奈良文化財研究所

島根県教育庁文化財課 島根県教育庁理蔵文化財調査センター

5. 下記の方々から多くのご教示、ご指導を頂いた。記して謝意を表すものである。（敬称略）五十音順）

池田善文・内田俊秀・岡泰正・小野正敏・河瀬正利・川副麻理子・小池伸彦・小泉和子・高田潤

玉井哲雄・鳥越俊行・仲野義文・中村唯史・藤原友子・細見啓三・村上 勇・村上伸之・山崎美和

6. 於紅ヶ谷地区の調査（平成14年度）は島谷、中田、竹田地区の調査は、守岡（平成12~13年度）、中田（平成14年度）、出土谷地区の調査は、大國（平成12年度）島谷（平成12~13年度）、中田（平成14年度）が中心になって行った。

7. 採図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。またレベル高は海拔高を示す。

8. 第1図・第2図は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。

9. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。

S B - 建物跡 SD - 溝跡 SK - 土坑 SX - か跡、特殊構造

10. 本書の執筆は第3章第2節(1)を島谷、その他は中田、編集は中田が行った。

11. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

# 凡 例

1. 造構・遺物図版中における表現は下記の基準で使用している。  
これ以外のものについては、個別に図中に示した。

## 〔造 構〕



被熱土壤



岩盤



炉壁



黄色粘土



灰白色粘土



灰色土



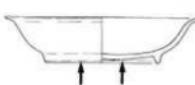
カラミ (精鍊米)



黑色土 (炭層)

## 〔遺 物〕

・図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。



器



段状付着物



溶化物



被熱部分

2. 本書の文中「ズリ」とは、選鉱工程にて除去される科学的变化に起因しない目的鉱物以外の石をいう。「ユリカス」とは、比重選鉱により除去された砂粒をいう。

# 本文目次

<b>第1章 遺跡の位置と歴史</b>	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 石見銀山史抄	3
第3節 遺跡の分布域と性格	5
<b>第2章 発掘調査の目的と概要</b>	7
第1節 調査開始から継続	7
第2節 総合調査の開始	8
<b>第3章 於紅ヶ谷地区の調査</b>	10
第1節 調査の経過と概要	10
第2節 於紅ヶ谷地区の遺構と遺物	12
<b>第4章 竹田地区的調査</b>	20
第1節 調査の経過と概要	20
第2節 竹田地区的遺構と遺物	21
<b>第5章 出土谷地区的調査</b>	36
第1節 調査の経過と概要	36
第2節 出土谷地区的遺構と遺物	37
<b>第6章 調査のまとめと課題</b>	44
第1節 於紅ヶ谷地区	44
第2節 竹田地区	44

## 挿図目次

第1図	石見銀山遺跡位置図 (S = 1 / 100,000)	1
第2図	石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1 / 25,000)	9
第3図	石銀地区・於紅ヶ谷地区・竹田地区調査区配置図 (S = 1 / 2,500)	11
第4図	於紅ヶ谷地区遺構配置図 (S = 1 / 250)	13
第5図	石垣実測図 (S = 1 / 60)	13
第6図	No.49間歩平面図・立面図 (S = 1 / 60)	15
第7図	工具痕実測図 (S = 1 / 10)	16
第8図	下層確認トレーンチ周辺平面図・土層断面図 (S = 1 / 60)	18
第9図	於紅ヶ谷地区出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	19
第10図	竹田地区トレーンチ調査区配置図 (S = 1 / 1,000)	21
第11図	竹田 I 区トレーンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 30)	23
第12図	竹田 I 区出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	25
第13図	竹田 I 区 S X 14 平面図・断面図 (S = 1 / 15)	25
第14図	竹田IV区平面図・土層図 (S = 1 / 30)	27
第15図	竹田IV区出土遺物実測図① (S = 1 / 3)	28
第16図	竹田IV区出土遺物実測図② (S = 1 / 3)	29
第17図	竹田V区土層図 (S = 1 / 60)	31
第18図	竹田V区出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	32
第19図	竹田地区金属製品実測図① (S = 1 / 2)	32
第20図	竹田地区金属製品実測図② (S = 1 / 2)	33
第21図	竹田地区製鍊関連遺物他実測図 (S = 1 / 2 135のみ 1 / 1)	34
第22図	出土谷周辺地形図 (S = 1 / 1,000)	37
第23図	出土谷 II 区平面図 (S = 1 / 120)	39
第24図	出土谷 II 区岩盤実測図 (S = 1 / 60・1 / 30)	40
第25図	出土谷 II 区石垣実測図 (S = 1 / 60)	41
第26図	No.247間歩実測図 (S = 1 / 20)	42
第27図	出土谷 II 区出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	43
第28図	於紅ヶ谷地区変遷模式図	44

## 本文写真目次

写真 1	上空から見た仙ノ山	2
写真 2	ズリの堆積	36
写真 3	灰吹銀	38

## 表目次

第1表	於紅ヶ谷地区出土遺物観察表	19	第2表	竹田 I 区出土遺物観察表	23
第3表	竹田IV区出土遺物観察表	29	第4表	竹田V区出土遺物観察表	31
第5表	竹田地区出土金属製品等観察表	35	第6表	出土谷 II 区出土遺物観察表	42

## 写真図版目次

- P L. 1 : 於紅ヶ谷地区全景（南西から）、同上（南東から）
- P L. 2 : No. 49間歩全景（南から）、石垣検出状況（北東から）
- P L. 3 : 下層確認トレンチ全景（南西から）、同上（南東から）
- P L. 4 : 石列検出状況（東から）、於紅ヶ谷地区平坦面（北東から）
- P L. 5 : 竹田地区S X14（西から）、遺物出土状況（東から）
- P L. 6 : 竹田IV区調査前（南東から）、竹田IV区製鍊遺構（北から）
- P L. 7 : 竹田IV区鉄鍋出土状況（西から）、同上（南から）
- P L. 8 : 竹田V区調査前（南西から）、同上（南西から）
- P L. 9 : 竹田V区調査前（北西から）、同上（北から）
- P L. 10 : 竹田V区調査前（北から）、竹田V区トレンチ完掘状況（南西から）
- P L. 11 : 竹田V区トレンチ完掘状況（北から）、竹田V区トレンチ完掘状況（南西から）
- P L. 12 : 竹田V区トレンチ完掘・土層堆積状況（北から）、竹田V区トレンチ完掘状況（南西から）
- P L. 13 : 出土谷II区坑口前トレンチ（南西から）、同上（南東から）
- P L. 14 : 出土遺物①、出土遺物②
- P L. 15 : 出土遺物③、出土遺物④
- P L. 16 : 出土遺物⑤、出土遺物⑥
- P L. 17 : 出土遺物⑦、出土遺物⑧
- P L. 18 : 出土遺物⑨、出土遺物⑩

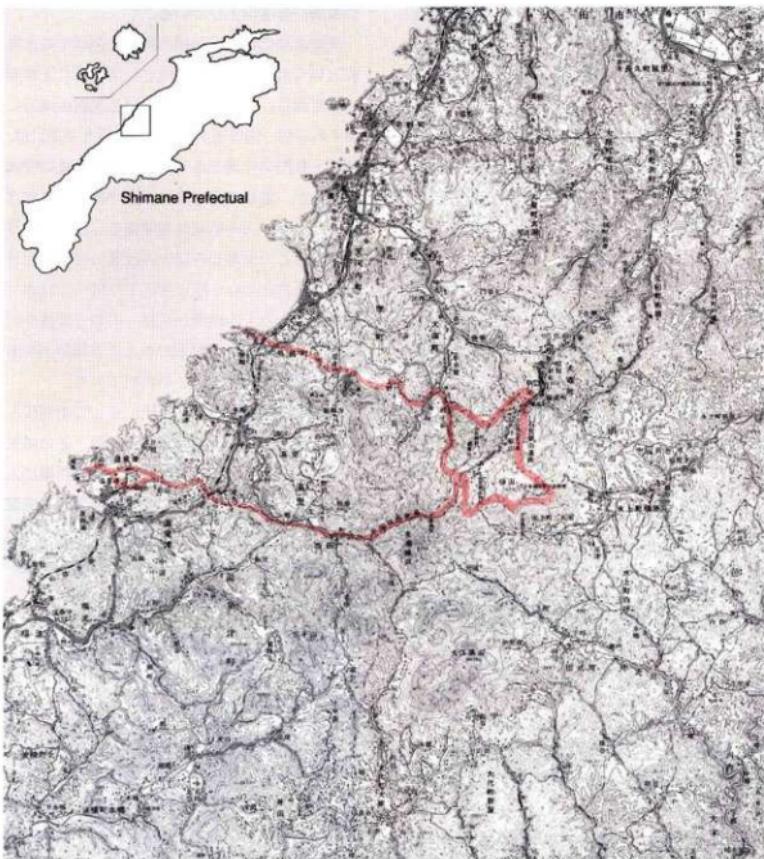
# 第1章 遺跡の位置と歴史

## 第1節 遺跡の位置と環境

### (1) 石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は東西に長く、日本海に面して約600kmに及ぶ海岸線を有している。旧国では出雲、石見と島嶼の隣岐の3国からなり、石見銀山は「石見国」の東側いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

出雲では、斐伊川をはじめとする河川によって、ややまとまりのある沖積平野が形成されている。これに比して石見では、江の川や周布川等の河口近くに平野は広がるが、海岸に至る山地帯によって沖積平野は広大には広がらない。海岸部に近い山塊群に象徴されることにより、「石海」や「石美」あるいは石群に石見の語源



第1図 石見銀山遺跡位置図 (S = 1/100,000)

があるともいわれている。

山陽と山陰を隔てる中国山地の山並みから派生した山地帯には、石見南部特有の高原地帯がひろがり、断魚渓や千丈渓といった瀑布線によって急激な高低差を見せる。加えて三瓶山（標高1128m）や大江高山（標高888m）などといった火山が分布し、山地帯とその間を縫う河川によって形成された小規模な可耕地や小集落が多く点在している。銀山の面影を伝える大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区も、こうした狭長な河岸段丘上に形成されている。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、大江高山から北へ4km、日本海から直線距離にして8kmの地点に位置する。大江高山は大山火山帯に属し、前期更新世に活動した火山といわれ、溶岩ドームのまとまりからなっている。仙ノ山はこの大江高山火山岩類の分布域にあり、角礫化火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を鉱脈の母岩とする。鉱脈には鉛染鉱床の福石鉱床、鉛脈鉱床である永久鉱床、という二つの鉱床が賦存していることが知られている。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないとされる。また永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鐵鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀などが含まれる。

## （2）歴史的背景

石見銀山遺跡は、周辺の歴史においても地形的な要因から石見独特ともいえるような特色を有している。以下に石見銀山周辺の歴史的な環境を概観してみたい。

縄文・弥生時代では、石東では発掘調査による資料が乏しかったが、近年の調査によって次第にその様相が明らかになってきた。仁摩町古屋敷遺跡は、潮川の河岸に形成された遺跡で、縄文時代晚期～弥生時代前期の遺物が土坑中から一括出土し、貴重な資料となった。潮川沿いには他に弥生時代の円形杭列が検出された川向遺跡が知られる。大田市鳥井南遺跡は日本海を

望む丘陵上に展開した遺跡で、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡が多数検出されている。

9、10世紀代の遺跡では、綠釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面鏡の出土した大田市八石遺跡が注目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁をも出土していることに加えて、河口に近い河岸という立地から、海上交通の存在を予感させるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では古墳時代の住居跡の他に、奈良平安期の建物跡や木簡が多数出土している。

平安末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立していることが知られており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見の守護となるが、応永の乱の後に石見守護職を没収される。しかし大内盛見は邇摩郡を分郡として与えられ、この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれることとなった。永正（1504～1521年）段階に至ると大内義興が石見一円の守護権を取り戻し、大内氏の支配下のもとに石見銀山が本格的な開発が行われたといわれている。

戦国期には大内氏と尼子氏、そして毛利氏とが銀山領有をめぐって争奪が行われ、その結果多数の城館が周辺に造されている。江戸期に入ると安濃郡と邇摩郡は石見銀山領となって直轄支配され、明治維新後には大森県が置かれた後に浜田県となり、明治9（1876）年には出雲、隠岐、石見からなる島根県が設置された。



写真1 上空から見た仙ノ山

### (3) 海外から見た石見銀山

ところで、海外で制作された日本地図に旧国名「石見」や石見銀山の記載があることが知られている。石見銀山と確認されるもので最も確実な例は、1595年のティセラ日本図である。スペイン王室の地図作家であったポルトガル人L.ティセラは、1592年にA.オルテリウス宛に以下のよう書簡を送ったといわれる。それは、「二枚の図すなわち中国図と日本図をお届けします。これらは新しく実際通り描かれたものです」という。オルテリウスはこの日本図を『世界の舞台』という世界地図帳の1595年増補版に掲載する。

ティセラの描いた日本図には、「石見」の国名のあたりに、ラテン語で「銀鉱山」(Argentifodina)と記されていて、石見銀山を表していることが注目される。同様に「銀鉱山」を記した地図は、1595年版、1596年刊行のリンスホーテン『東方案内記』付図、ラングデン・インド以東図に見える。この図における日本は、いわゆる「エビ型」(ドラード型)をしており、1563年のルイスによるインド以東図あるいは東アジア図に見られる形状である。

17世紀に入っても石見における「銀鉱山」の表記は見ることができ、1605年メルーラ『天地万有誌』所載世界図、1613年J.メルカトルの日本図など、いずれも日本の中では唯一の銀鉱山の表記となっている。

## 第2節 石見銀山史抄

### (1) 発見から灰吹法の導入

石見銀山は、延慶2(1309)年に大内氏によって発見されたという伝承が残る。発掘調査では、近年、相次いで須恵器が出土している。資料整理中ではあるが、石見銀山遺跡宮ノ前地区では、江戸初期の建物跡を遺跡の主体としているが、埋土中あるいは地山直上面に古墳時代後期ごろの須恵器が採取されている。また、仙ノ山山頂でも須恵器が発掘調査によって小片かつ少量ながら検出されている。

大内の発見伝承に対して、16世紀初頭に博多商人の神屋寿禎が行う本格的な開発との対比から、神屋の開発を、再開発や再発見と表現することが一般的である。

神屋寿禎の開発は、出雲鷲銅山の山師三島清右衛門とともに金堀(通子)の吉田与三右衛門、吉田藤右衛門、於紅孫右衛門らによって、大永6(1526)年に始めたと石見銀山旧記では伝える。

発掘調査の成果では、再開発を前後する時期の遺物も検出されている。柄畠谷II区下層確認トレント内SD02より出土した遺物がそれであり、時期は数点を除いて15世紀後半から16世紀中葉までの範囲内におさまるものである。他に14世紀後半から15世紀初頭の年代観が与えられる中国製の青磁瓶の破片も出土しており、これは伝世品の可能性が指摘されている。

石見銀山史において大きな画期となった灰吹法の伝来は、天文二(1533)年といわれる。「日記」ではこのことについて、「天文二年大内復銀山を取返して～略～此年寿亭博多より宗丹桂寿と云ものを伴い乗り八月五日相談し鎖銀と石と相雜ものを鎖と云、を吹溶し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也」とある。『おべに孫右衛門えんき 一名 銀山旧記』では、「白銀吹き初め候事、天文二年八月十五日 九州博多より慶寿と申神門参られ吹申候」という。慶寿については、先の「高野山淨心院往古旦家過去帳姓名録」に「出し士 慶寿 十五日」と記載があり、実在の可能性が推定されている。

灰吹法の伝来元である朝鮮半島ではそれ以前に、銀産統制のもと民間で日本鉛を使った灰吹法による銀鉱石の製錬が行われており、その禁を犯した者が罰罰されたといふ。(『李朝実錄』)

博多の商人神屋寿禎は、大内の庇護の元で半島との交易を通じて技術の導入を試みたともいわれる。いずれにしても、灰吹法の導入により石見銀山の産銀が飛躍的に伸張していくことになった。その例として、同じく『李朝実錄』では、1538年、「倭人は銀だけを持ち他のものは

持ってこない」という記載をはじめ、1542年「倭国で銀を造り始めて十年にもならないのに倭銀が我が國に流布し、既に賤物となっている」ことや銀8万両の貿易を日本国王使僧安心が求めている記事を伝える。

中国においても、スペイン船、ポルトガル船によってもたらされる南米のボトシ銀山産の銀が流入する前に、福建のジャングによって日本の銀が買い付けられたといわれている。また、1552年フランシスコ=ザビエルがロドリゲス神父に当てた書簡には「カスチリア人はこの島を銀の島と呼んでいる」と紹介しており、日本の産銀の増大が知られる記事である。

## (2) 争奪戦と徳川の掌握

石見銀山の争奪戦をめぐっては、原慶三氏によって、当初から大内氏の支配下にあり、謀反による大内自害に乘じた弘治2(1556)年から永禄4(1561)年まで、尼子氏が銀山を領有。その後、毛利の支配下に入る、とされている。

毛利氏は温泉津を直轄地として、銀山を「温泉銀山」「銀山温泉津」と称した。また、幕府と朝廷に料所として寄進、朝廷に対して毎年上納を続けていたという。詳細な生産高は不明であるが、「銀山納所高辻」(『毛利家文書』)によれば、毛利氏直納分として1年間で都合33,000貫あまりあったという。

本能寺の変の後、秀吉は毛利と和議を結び、その後文禄元(1592)年、慶長元(1596)年、の朝鮮侵略に際して石見銀で大量の石州御公用銀を造り、その戦費としたといわれている。関ヶ原の戦の後、石見銀山は徳川氏の管轄に置かれることとなり、荷分割と甲州流といわれる鉱山技術によって鉱山経営に長けた大久保長安による銀の増産が行われることとなった。

石見銀山遺跡には、墓石を中心として数多くの石造物が残されているが、近年の石造物調査によって、從来天正年間を最古としていた墓石の年号が、元亀3(1571)年に遡ることが知られるようになった。また、銀山全域の悉皆的な

調査は未了であるが、墓石の数的ピークは、およそ1600年頃と1800年頃にあるとされる。

## (3) 江戸期の石見銀山

石見銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎える。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は毎年3,600貫の銀を産したという。

銀山経営を支える仕組みとして、元禄年間(1688~1704)頃より石見銀山領の村々のうち佐摩村を中心とした周辺の邇摩郡・安濃郡・邑智郡に銀山御園村32ヶ村が設定され、坑内の支柱(架材)製鍊や坑内作業に必要な炭、糞、臼などを供出することが義務付けられた。それぞれの坑道の経営方法は慶長初期頃から奉行所(代官所)直営の御直山と、山師の請負山である自分山があった。御直山の経営は公費から資金・資材が提供され、鉱石を一定の割合で公儀・山主・銀掘りに荷分けされるもので、その割合は時代により変遷があった。

江戸期を通じて奉行・代官・預りが59人あり石見銀山附御料約4万8千石の統治と銀山の管理をおこなっている。

寛永期(1624~1644年)以降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に経費がかかるようになる。延宝年間(1673~1680)になると産銀量は年間約400貫に減り、幕末の安政6年には30貫と記録にある。元禄4(1691)年には問番数92の内63が休山、正徳4(1714)年には、127の内75、享保14(1729)年では、129の内74、文化13(1816)年では277の内247、天保15(1844)年285の内251が休山となっている。

## (4) 近代の鉱山開発

明治維新後、石見銀山は太政官布告により地元に払い下げられ小規模な経営が実現されたが、明治5(1872)年の浜田沖地震で坑道はほとんど水没し、全山休山状態となった。明治19年合名会社藤田組が1鉱区の借区権を買取り、翌20年には全鉱区を買取り、仙ノ山南の銀山部(本谷鉱区)で探掘が開始された。この時から大森

鉱山となり、鉱山事務所を銀山部におき、24年からは邇摩町柑子谷の永久部（永久鉱区）に製鍊所が建設された。28年には清水谷に収銀湿式法による新製鍊所が建設され操業を始めたが、翌29年に良鉱が得られなかったことなどにより、休止することになった。開発の中心は永久部となり、同35年には発電所を建設、電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。

主要產品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気に乗り盛りをみた明治後期から大正初期には、柑子谷は一大鉱山町に発展した。大正6年（1917）の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、その上安価な外国産銅におされ、ついに大正12（1923）年6月に休山に追い込まれた。昭和16（1941）年、国の援助で再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、柑子谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、坑道も水没して再開発は断念され、現在に至っている。

発掘調査では、「藤田組大森鉱山」と書かれた陶磁器が柄畠谷地区、出土谷Ⅱ区で出土しており、柄畠谷Ⅱ区では製鍊施設とそれに伴う坑道が検出されている。

### 第3節 遺跡の分布域と性格

#### （1）遺跡の特徴

石見銀山遺跡は大田市大森町を中心に、周辺の仁摩町、温泉津町などを含めた広い範囲に分布し、特に銀山跡が存在する大森町には遺跡が集中している。遺跡は大きく銀山地区と、石見銀山や銀山御料に関する行政、通商の機能を有していた大森地区、および周辺に点在する石見銀山に密接に関わる関連地区からなり、生産遺跡を中心に、人々の生活や銀山の統治に係わる様々な遺跡から構成される。遺跡の年代が中世から近代まで約400年に及び、重層性、複合性をもつ遺跡の集合体であることが石見銀山遺跡の特徴のひとつとなっている。

#### （2）銀山地区

銀を出した銀山跡と、銀生産に携わった多くの人々が居住し、生産と生活に係わる物資が多量に流通・消費された銀山町遺跡である。

【生産遺跡】間歩分布調査では、露頭掘り跡が47か所、坑道跡526か所が確認されている。採銀遺跡の分布は銀を中心とした福石鉱床と銀・銅のある永久鉱床の賦存と一致している。坑道掘りの代表的な遺跡として、大久保間歩、釜屋間歩、本間歩、龍源寺間歩などがある。また、発掘調査で検出された石積みの水溜めや溝などの運鉱に関連する造構、炉跡・鉄鍋・石鉢などの精鍊に関連する造構がある。

近代の遺産としては、製鍊所跡、トロッコ道、変電所跡などが知られている。

【生活遺跡】仙ノ山一帯に広い範囲で大小の平坦面（テラス）が認められ、そのほとんどが住居兼工房と推定されている。発掘・分布調査、文献等から石銀集落跡、柄畠谷集落跡、下河原集落跡、上市場集落跡、休谷集落跡などがあり、これ以外にも銀山七谷を中心に多くの集落跡が存在する。

【城館遺跡】戦国期銀山争奪戦の拠点となった要害山に築かれた山吹城跡がある。仙ノ山の北西に谷を隔てて位置し、主要な郭は北西から南西にかけて伸びる尾根上に集中する。要害山の南東、休谷に面して大手があり、戦国期の毛利氏領有期には銀山管理の休役所が置かれ、現地には役所跡の長大な石垣がのこされている。

【支配関連遺跡】戦国期の休役所跡は、江戸時代に初代銀山奉行となった大久保長安の奉行所となり、周辺には御銀蔵や吹屋などが所在したといわれる。江戸時代銀山には仙ノ山を取り囲むように柵列が築かれ、10か所の口番所が置かれ、発掘・分布調査によりそれぞれの番所の位置と藏泉寺口番所跡では柵列の造構と推定される石列が確認されている。また幕府直営の坑道の入り口に置かれた四ツ留役所跡が龍源寺間歩坑口前の発掘調査で検出されている。

【信仰遺跡】寺院が約70、境内をもつ神社が数

か所あり、祠や石造物なども多数認められる。寺院は寺跡が確認できるものが20数か寺あり、由来は不明であるが地名として残っているもののが多数を占めている。石造物調査では龍源寺間歩上墓地や妙正寺墓地などにおいて墓標を中心とした石造物の分布調査や実測調査により、形態や葬地の変遷などが明らかにされている。柄畠谷に位置する佐尾亮山神社は、別当寺として神宮寺をもつ、神仏混淆の社殿・境内と神楽殿を有している。

【歴史的町並み】山組頭、銀山附役人遺宅などが残る、鉱山操業時以来の歴史を引き継ぐ町並みがある。

### (3) 大森地区

近世初頭に銀山町を柵内、大森町を政治・経済の町として区分し、代官所、向陣屋など銀山御料の統治関連施設や郷宿、御用商人宅などがある。

【支配関連遺跡】代官所跡には文化12(1815)年普請の表門と門長屋が現存している。代官所跡地南側の発掘調査では蔵跡と推定される石列が検出されている。また周辺には手代・手付役宅があった向陣屋跡、馬場跡、御銀蔵跡、中間長屋跡などがある。

【歴史的町並み】郷宿、地役人、町年寄、同心遺宅や寺社などが残る、銀山操業時以来の歴史を引き継ぐ町並みがある。町並みは街道に面して塀を建て主屋を奥まった場所に設けている武家屋敷と、街道に面して主屋、土蔵、塀を連ねる町屋が混在するのが特徴となっている。また信仰遺跡である寺院跡や墓地・供養塔などの石造物がある。

### (4) 関連地区

大田市大森町に隣接する仁摩町、温泉津町には銀生産と物資の流通などにより結ばれた、関連する遺跡が存在する。

【城館遺跡】山吹城跡周辺には数多くの山城があり、代表的な城跡として、矢滝城跡、矢苦城

跡、石見城跡、鶴丸城跡、櫛山城跡がある。このうち鶴丸城跡、櫛山城跡は中世の港として繁栄した温泉津町の沖泊港入り口に築かれた海城である。鶴丸城跡は築城の経緯が文献に記された城として知られ、元亀元(1576)年に毛利氏の命により、毛利水軍の拠点として築かれたといわれ、銃陣を數くための三段の帯郭を備え、大手に樹形虎口を用いた縄張りに特徴がみられる。

【港湾遺跡】戦国期から近世に銀鉱石の搬出や銀山への物資搬入港であった炳ヶ浦、沖泊、古柳、温泉津、小浜などがある。炳ヶ浦、沖泊には船を係留するための、海岸の岩盤を加工した「鼻ぐり岩」が多数残されている。

【支配関連遺跡】江戸時代、国境や交通上・警備上の要衝地に配置された口番所、船表番所がある。詳細については不明である。

【交通遺跡】銀山と流通上必要な地を結んだ街道がある。街道調査により、戦国期に銀鉱石を搬出した炳ヶ浦～銀山ルート、戦国期から近世に銀山の外港となった温泉津～西田～銀山ルート、近世に銀の大坂納めのために確立した大森～赤名～尾道ルートなどが明らかにされている。現地には街道跡とともに石畳や石段、道標などの遺構が存在することが確認されている。

【生産遺跡】銀山に鉄製品を供給した製鉄遺跡が数多く存在するが、大規模なものとして仁摩町宅野の達水鉄山所跡がある。銀山で使用される石造物や建築材となる石材を切り出した温泉津町福光の福光石切場跡がある。

【歴史的町並み】銀山への物資搬入の拠点港として港町、そして温泉町として栄えた歴史をもつ温泉津の町並みがある。廻船問屋遺宅や寺社、廻船問屋の廟式墓地などが点在している。

## 第2章 発掘調査の目的と概要

### 第1節 調査開始から継続

【昭和58年】

石見銀山遺跡において発掘調査が開始されたのは石見銀山遺跡総合整備計画策定事業に伴って、昭和58年度の蔵泉寺口番所跡推定地と代官所南地区の調査からであった。調査の目的としては「拠点地点での遺構確認と保存・整備の資料を得る」と報告にあるように、トレンチによる調査で、下層遺構の確認は行っていない。

調査の結果、蔵泉寺口番所跡では明確な遺構が確認されなかったという。また、代官所南地区では自然石積みと切石の石列等を検出した。

【昭和63年】

昭和58年以降、発掘調査は一時中断したが、昭和62年に町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定され、整備と活用事業に伴って調査が行われるようになった。

昭和63年度には龍源寺間歩遺跡が発掘され、龍源寺間歩の坑口付近の平坦地が調査されている。坑口東側の平坦地（I区）では、第1遺構面で建物跡2を確認、下層遺構面では建物跡1が確認された。第1遺構面では建物内にピットや「炉跡状の土こう」を検出、遺物ではタガネなどの工具が出土したという。下層遺構面に至る整地土中には陶磁器類・寛永通宝等が出土し、厚さ40~50cmと報告されている。下層遺構面では炉状の集石遺構と18世紀代の陶磁器が出土、他に暗渠のような排水施設と、岩盤を穿った溜枡状遺構とピットが検出されている。

坑口西側の平坦地（II区）では、第1遺構面で建物跡1、第2遺構面で建物跡1、第3遺構面では岩盤加工遺構が検出されている。時代はそれぞれ近代、江戸時代、及び戦国期の可能性が指摘されている。

【平成元年】

平成元年度は向陣屋跡、蔵泉寺口番所跡、植（上）市場集落跡の3カ所が調査されている。

向陣屋跡では1.5×3.5mのトレンチを2カ所設定、掘り下げをおこなっている。土層観察によって明褐色粘土質土が堅く締まるところから、向陣屋に関連する遺構面と考えられている。

蔵泉寺口番所跡の調査では、II区において表土から30~50cmのところに方向の違う石列が検出された。北東～南西方向に伸びる石列は、銀山を開んだ柵列と推定されている。遺物は16世紀中頃から19世紀代と幅広く、整地層中のものが多い。植（上）市場地区では戦国から明治までの3つの遺構面が確認された。

【平成2年】

平成2年度は元年度からの継続で蔵泉寺口番所跡、そして新たに大龍寺谷地区と旧河島家敷地内が調査されている。蔵泉寺口番所跡では、16世紀後半から19世紀前半の遺物が出土。16世紀第4四半期～17世紀前半の遺物から、番所が江戸時代に入り整地・構築されたことを裏付けている。

大龍寺谷地区では17世紀前半が中心で16世紀第3四半期の遺物が出土している。II区では整と要石の出土から鉱夫が住んだ建物跡と推定されている。

旧河島家敷地内の調査は、「河島家」南側の空地を調査した。表土から50cmで遺構面を確認、井戸跡、石組みの柱穴状遺構、石列を検出した。

【平成3年】

平成3年度は下川原下組地区的調査が行われた。遺構は礎石立てによる間口の狭い建物跡で、か跡などを伴い近世初頭の銀の精錬所とみられ、下川原吹屋跡とされた。

【平成4年】

平成4年度は、山吹城下屋敷地区的調査が行われた。6カ所のトレンチによるもので、字限団から、現存の高さ10mの長大な石垣及びその西側平坦地を休耕所と推定、第2トレンチにて確認したところ、礎石を2つ確認。16世紀末か

ら17世紀前半の遺物より、戦国期の休役所か、江戸時代大久保長安の奉行所と推定されている。また第5トレンチで炉跡2基を検出している。遺物は繩、分銅がある。

## 第2節 総合調査の開始

【平成5～7年】

平成5年度からは仙ノ山山頂の石銀地区の調査が開始される。平成5～7年度に調査された石銀千疊敷南向山地区では、谷中央の道跡を挟む形で建物跡2棟を確認。建物内に炉跡や造鉱施設とみられる土坑等を検出し、精錬に関する建物（吹屋）と推定。さらに下層には戦国期に遡る遺構の存在を明らかにした。

【平成8年以降】

石銀地区的調査を契機として、平成8年度からは島根県教育委員会と大田市教育委員会との合同調査となり、発掘調査委員会が組織される。「採鉱と精錬の技術体系の解明を調査の柱とし、400年に及ぶ鉱山都市の実態を明らかとする」ことを目的に調査計画を立案、加えて科学的調査を発掘調査と同時並行で行う連携によって、石見銀山遺跡解明に向けての進展が図られた。

平成8年度から石銀藤田地区の調査を開始、翌平成9年度には下層確認トレンチの戦国期の遺構面から鉄鍋が出土。科学的調査の結果、灰吹きに使用されたことが明らかとなった。石銀藤田地区的調査は平成10年度まで継続され、採掘から精錬までを行っていた状況や、遺構面が最も多いところで9面あることを確認。また、谷の中央に水路を伴った道が整備され、建物が連続して立ち並ぶ状況が判明した。

調査報告I（「石見銀山発掘調査報告書」1999島根県教育委員会・大田市教育委員会）は、以上述べてきた昭和58年から平成10年度の調査結果をまとめ、特に島根県教委・大田市教委の合同調査のうち、石銀地区的報告書とした。

発掘調査委員会では、仙ノ山一体の鉱山遺跡としての解明を進めるため、石銀地区以外の操業の拠点となつたいくつかの地区のうち、特に

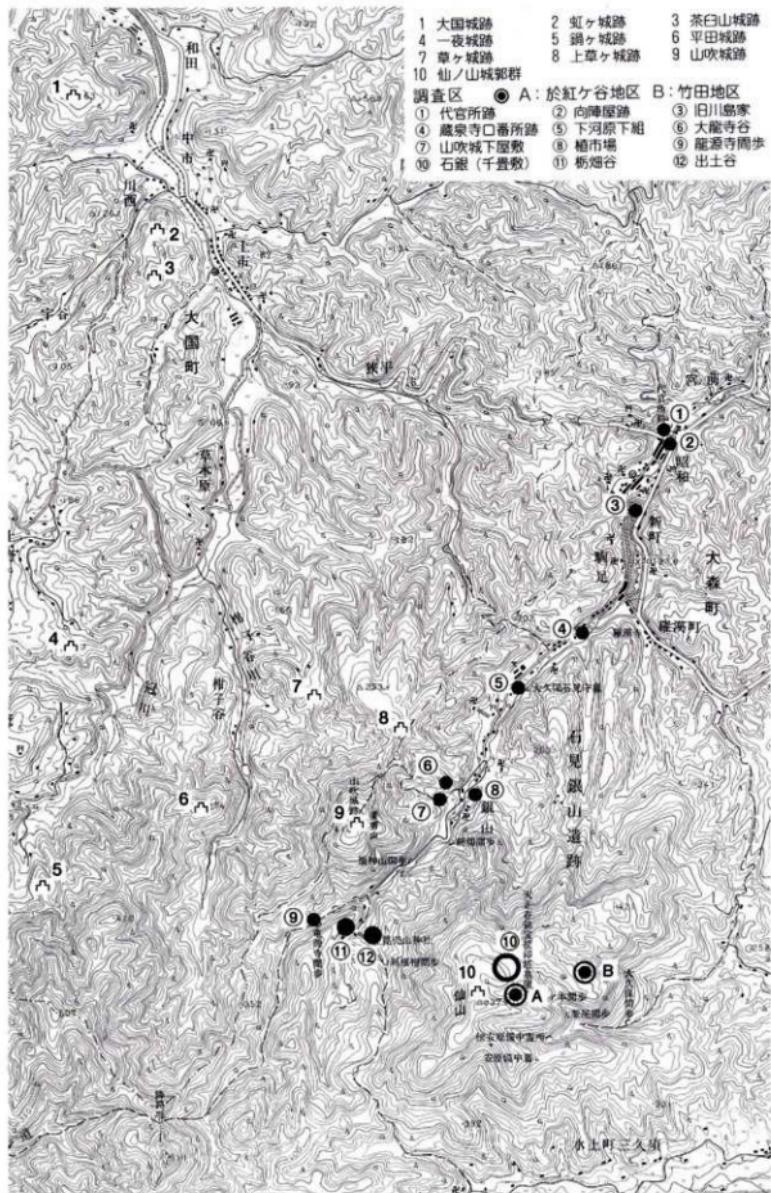
戦国期から開発が始まったといわれる出土谷地区、柄畠谷地区、於紅ヶ谷地区、竹田地区で調査を行う必要性が指摘された。

これをうけて出土谷地区は平成9年度から、柄畠谷地区・於紅ヶ谷は平成10年度、竹田地区は平成11年度から調査に着手した。出土谷地区は、文献では戦国期に灰吹法を伝えた慶寿が居住し精錬をおこなった場所という。また、鉱山の信仰の中枢である佐尾山神社に隣接することから、戦国期からの精錬の中心であったと考えられてきた。柄畠谷地区は、出土谷地区と同様に、戦国期からの精錬工房が存在したことや「京町」、「京店」といった地名に表れる「町」が形成された地域である、とも指摘されてきた。調査の結果、柄畠谷地区では、16世紀から近世、近代に至るまで、盛り土のみでなく、削平によっても整地が行われていることが判明し、検出された上面の遺構は近代における製錬関係の施設と推定された。また、戦国期の遺構が谷部で初めて確認されたことも成果となった。出土谷地区では、おもに18世紀後半～19世紀半ば頃の製錬施設を伴う吹屋を検出した。下層確認のトレンチでは、戦国末に遡る遺物が出土していることが明らかとなり、また、広い範囲で数度にわたって地形変更が行われていることも判明した。

調査委員会で発掘が了承された於紅ヶ谷地区的目的は、鉱山遺跡特有ともいべき、採掘跡付近にある建物との関係を理解することであり、形態的に古い採掘痕の残る場所として選択された。

竹田地区は、仙ノ山山頂付近において谷地形ではなく削り出しや盛り土によって形成された場所であり、銀山史の中でも古い様相が確認できることが期待され、調査区を設定した。

今回報告する於紅ヶ谷・竹田・出土谷地区は、上記のような調査計画と成果に従って、広範囲にわたる遺跡のあらましを窺う目的で行ったものである。



## 第3章 於紅ヶ谷地区の調査

### 第1節 調査の経過と概要

本地区での調査の経緯は、既に調査概要11.12に詳しいため、ここでは目的と成果について概述しておきたい。

平成10年度の調査目的は、これまで発掘調査が行われていなかった通称「於紅ヶ谷」にトレチを設定、掘り下げを開始することにあった。トレチは、座標軸を基準に2m×4mの規模で谷中央部に配された。

谷中央へのトレチの配置は、石銀千疊敷、石銀藤田地区の道に面して建物が建ち並ぶという調査成果をもとに、設定された。

調査の結果、上層に道跡らしきレキ敷き部分を確認し、下層にはやや締まった土間と見られた土層を検出した。土間と見られた土層には建物礎石と確認できる石があったため、周辺にトレチをさらに二つ設定し掘り下げた。その結果、概ね17世紀初頭頃と考えられる礎石建物の存在を明らかにした。

平成11年度の調査目的は、検出された礎石建物跡を概要を確認することにあった。

座標軸に沿った調査区設定から、礎石列の方向を基準に変更し、10m×15mの調査区を再設定。あわせて周辺の傾斜変換点まで幅1mのトレチを配置し掘り下げた。調査の結果、礎石列の広がりを確認したが、礎石列に新旧の違いや、土間面に遺構が存在している可能性を残した。

平成12年の調査は、建物跡の解明及び周辺の間歩との関連を探る目的で行った。

建物跡の礎石検出面を精査するとともに、建物西側および南側に向けて調査区を拡張し、新たにNo.267間歩前、No.49間歩前にトレチを設定。石垣のある北東側にはトレチを延長し断ち割り、加えて礎石列の東側への広がりを確認するためにトレチ（3T）を設定した。

調査の結果、1600年頃に谷を埋める造成で整

地された面に、建物が設置されていた状況を確認。建物跡に伴って、石積み施設や比重選鉱に関連した施設、羽口を埋土に混入する土坑等の遺構を検出した。また、周辺の間歩は、再採掘された痕跡や、溝状に露頭掘りとして鉱脈を追っている状況を明らかとした。しかしながら、No.49間歩と建物跡との関連や下層の状況、あるいは建物跡周囲の道や石垣などについて、調査する必要性が指摘された。

平成13年度は、上記の前年の課題を解決するために、石垣部分と建物北側にトレチを新たに設定。No.49間歩前のトレチを拡張。そして建物跡西側の調査区を拡張した。

下層確認は、前年に拡張した北西拡張区にて行い、特に岩盤が検出された箇所を重点に行つた。調査の結果、建物跡は新旧二つの時期があり、古い方の時期の建物跡が埋められた後、道状の遺構がその上部を通過して、No.49間歩へとつながることを確認。さらにNo.49間歩の前では、露頭掘り跡が近世初頭には埋まっている状況を確認した。

新たに設定したトレチでは、石垣が2段に積まれている状況と、石垣と共に構築された水路跡を検出した。また、下層確認では岩盤を加工した遺構を検出した。

以上がこれまでの調査目的と成果の概要である。

平成14年度は、岩盤加工遺構を中心とした下層確認を目的に調査を行った。次に報告する内容は、①石垣の状況および平坦面との関連、②No.49間歩前のトレチの詳細と採掘の状況、及び③下層の確認、の平成13、14年度調査結果による3つの事項である。



第3図 石銀地区・於紅ヶ谷地区・竹田地区調査区配置図 ( $S = 1/2,500$ )

## 第2節 於紅ヶ谷地区の遺構と遺物

### (1) 石垣と平坦面

於紅ヶ谷地区の平坦面を形成している重要な要素に、谷側に面して残存する石垣がある。この石垣は調査前から一部が露呈する状態にあるが、規模、形態、築造年代等について不明な点が多く、平坦面調査に合わせて2本のトレンチを設定して部分的な検討を試みた。

石垣の現状は、北東隅に石垣のコーナーが残り、やや大きめの割石が高さ1.5mほど、岩盤上にほぼ垂直に積まれており、その最高点は標高で455.6mである。このコーナーから北西に向かっては、途中大半が崩落しているものの、その延長線上に2、3段ほど垂直に積み上げたところが長さ2.1mほど残存し、割石の中には幅5cm、深さ7~9cmほどのヤ（クサビ）の痕跡をとどめたものが認められる。現存する北側の最も高い位置の石は標高にして455.1mあり、コーナーの最高点とは0.5mの比高差がある。双方の石垣が本来の上端を残しているとすれば、両者を結んでできる石垣の上端ラインや、これによって形成される平坦面は水平ではなく、北側が低く、逆に南側が高かったことになる。

また、コーナーから南西に向かっては、現状で石垣の上端を確認することはできない状況にあるが、No.267、No.268間歩から排出されたズリの堆積によって覆われている可能性が高く、少なくともコーナーから1mほど離れた下方では岩盤に挟まれて深く落ち込む谷部に石垣を認めることができる。ただし、この場合の石垣は北東側でみられる大きめの割石とは異なり、小さめの石が積まれているのが観察できる。

#### 【第1トレンチ】

平坦面で行われた調査区の南東壁の延長線上に設定した、幅1.5m、長さ5mほどのトレンチである。調査の結果、かなり下位で石垣の残存部分を検出し、また、これより谷側に3m離れて新たにもう一段低い石垣を確認した。

上段の石垣の残存部の高さは標高で452mである。前方に崩落した石に阻まれて、上面より

深さ20cmほどしか確認出来なかつたが、ほぼ垂直に積まれていると推定される。また、石垣の前面には相当量のズリが堆積していることが分かつた。堆積状況をみると、2層は10~30cm大を中心とするやや大きめのズリ層であり、石垣崩落後の堆積とみられる。3層は2~4cm大を中心とする比較的の小さなもので、石垣崩落時もしくは崩落前の堆積の可能性がある。

上位の石垣が崩落した部分では平坦面を形成する土層の断面をみることができ、20~30cm大、または5~10cm大を中心とするそれぞれのズリ層（d層・f層）が、粘土質の土層（c層・e層）を挟んで縮まりながら互層状に堆積している状況が観察された。また、少なくとも下位の方ではあまり裏込石を詰めていない状況もうかがえた。

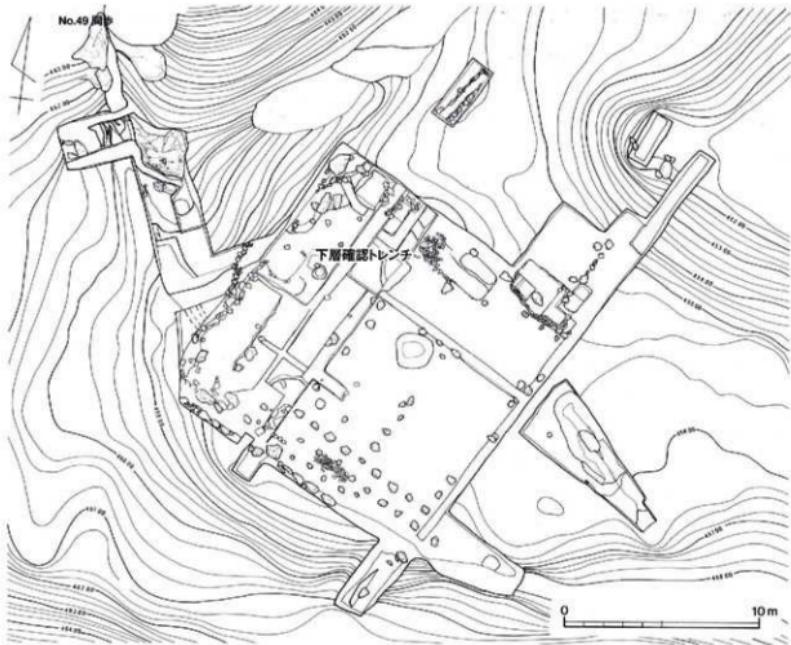
下段の石垣は上段の石垣より谷側に3mほど離れて存在する。この石垣は小石を雜に積み、検出した範囲内ではおよそ60°の傾斜角度がある。上端から深さ40cmのところまで確認したが、これ以上の高さがあるとみられる。この石垣によって形成された平坦面はほぼ水平になり、その上面はやや縮まりがあった。狭い範囲なので明確にし難いが、上段の石垣の並びとほぼ平行関係にあるように思われる。

出土遺物は、崩落土中の下位から17世紀初頭の灰釉皿片や、16世紀末ないし17世紀初頭とみられる中国製青花皿片が出土した。

#### 【第2トレンチ】

第1トレンチから北西側に離れて設定した、幅1m、長さ4.4mほどのトレンチである。調査の結果、石垣の下部を確認するとともに、ここでも2.8m離れて、もう一段低い石垣を検出した。

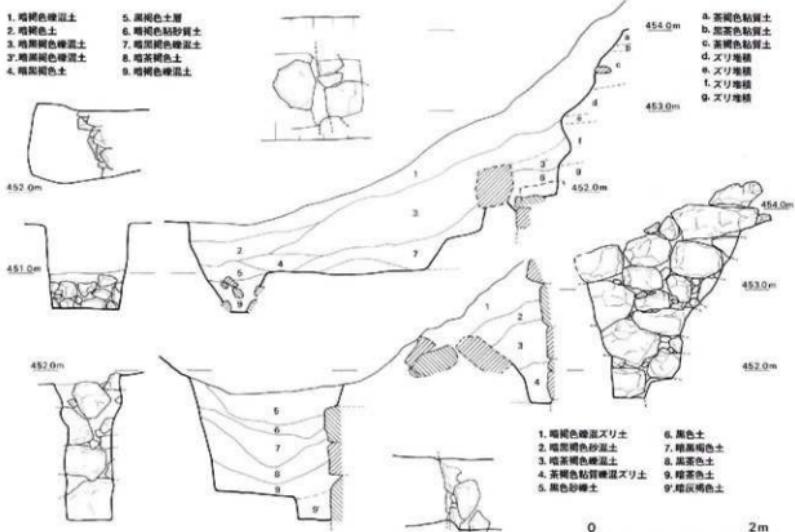
上段の石垣は深さ2mほどのところまで確認した。やや大きめの割石が用いられ、もとは直立していたと考えられるが、現状では上位が前方に向かって倒れ気味である。ここでも石垣の前面に多くのズリが堆積している状況が認められた。



第4図 於紅ヶ谷地区遺構配置図 ( $S = 1/250$ )

- 1. 暗褐色縞混土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐縞色縞混土
- 4. 暗褐縞色縞土
- 5. 深褐色土質
- 6. 暗褐色砂質土
- 7. 暗黒褐色縞混土
- 8. 暗茶褐色土
- 9. 暗褐縞色土

- a. 深褐色粘質土
- b. 暗茶色粘質土
- c. 黑褐色粘質土
- d. ズリ堆積
- e. ズリ堆積
- f. ズリ堆積
- g. ズリ堆積



第5図 石垣実測図 ( $S = 1/60$ )

下段の石垣は上段の石垣より谷側に向かい2.8mほど離れて検出した。確認したのはトレンチ幅80cmほど、深さは上端から1.4mまであり、さらに高さがあると推定される。上段と同様、やや大きめの割石が用いられ、ほぼ垂直に立ち上がっている。また、その向きも上段のそれとほぼ平行関係にある。

トレンチ内の土層は自然堆積の単純層であるが、ここではズリをあまり含まない。そのうち8層・9層はやや粘性があってゆりかす状の砂粒を多く含んでいた。

以上、トレンチ調査の概要を記したが、上段の石垣の高さについてみると、コーナーでは岩盤からの高さが1.5mほどと低いが、最も深く調査したところでは北西側の現存石垣の最高点から測ると、少なくとも5.4mほどになり、山頂部における石垣のなかでは比較的大規模なものであると分かった。また、その築造方法は比較的大きめの割石を用いてほぼ垂直に積み上げる特徴があり、石垣の下方で新たに検出された石垣とも合わせると前後2段に構築された可能性も考えられる。さらにこの前後2段の石垣には幅3m近い平坦面が存在し、於紅ヶ谷地区は単に一平坦面の造成に終わっていない状況がうかがえた。

ただし、この2段の石垣が同時期のものか、前後して築成されたのか、あるいはその間の平坦面がどのような性格のものか、といった点について今は後に残された課題である。

石垣の築造時期についても今回一部しか調査していないため、現段階で明確にすることは困難であるが、第1トレンチの上段石垣の下方堆積土中から17世紀初頭とみられる灰釉皿や、16世紀末ないし17世紀初頭とみられる中国製青花皿が出土したことを利用すればこれ以上下ることはなく、17世紀初頭までに築造されたものとみてよいと思われる。この点は平坦面の調査で明らかにされた、主たる平坦面形成が出土遺物からおよそ16世紀末から17世紀初頭と判断されることと矛盾するものでないと考えられる。

## (2) No.49間歩前トレンチ

既に前年までの調査によって掘り下げられていた「1-2トレンチ」について、上層の石を除去し、岩盤に沿って掘り下げ、岩盤から露頭掘りに至る下層の状況と、間歩にかけての土層断面の観察を行った。

### 【岩盤の状況】

岩盤には、縦方向から穿たれた小穴と、岩盤下方から上方に向かって連続して横方向から穿たれた小穴を確認した。

縦方向の小穴は間隔約85cm、底面での直径10cm程度であり、底面は平らに形整されている。

横方向から穿たれた小穴は、ほぼ水平方向から掘られており、その平面間隔は概ね60cmであり、直径が約5cmと均一である。水平方向からみると(第6図右上)No.49間歩の入口方向へ向って上がっていくことから、階段状の造構が想定された。

### 【露頭掘り採掘痕】

露頭掘りをおこなった岩盤に対する溝状の採掘痕の観察から次のことが窺えた。

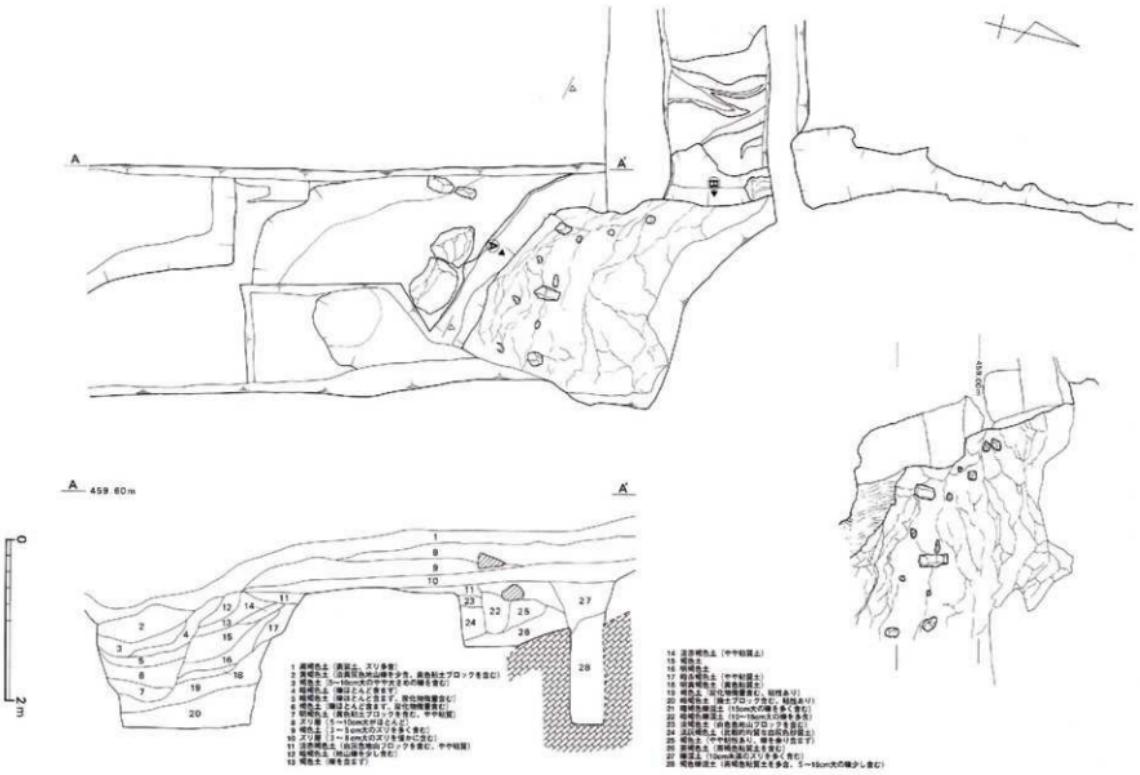
岩盤側の立面に残る工具痕は縦方向に穿たれていて、その単位が明瞭に確認できる。これに対して反対側、建物跡側立面の工具痕は工具を細かく用いており、工具の一回の掘削単位が判別できない状況を呈していた。

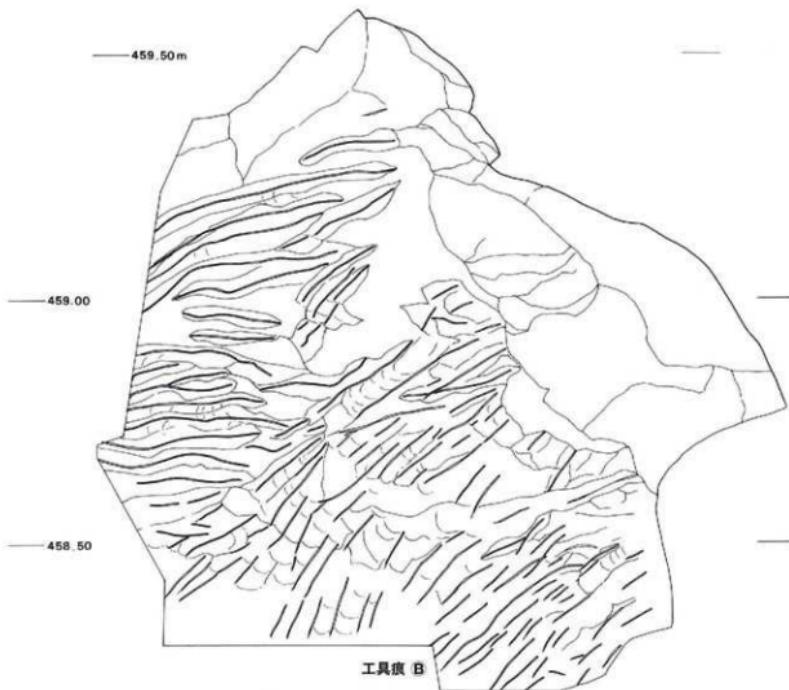
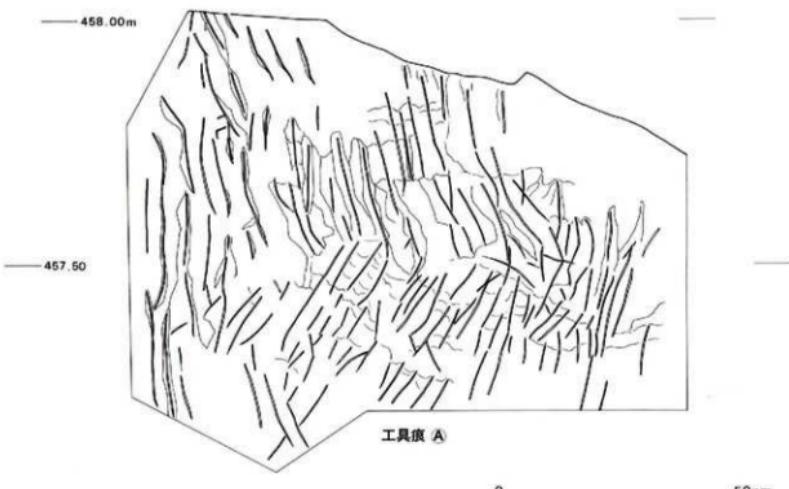
岩盤側の痕跡から想定される工具の幅は、約1cm、先端の状況は明確ではないものの、鑿と判断された。付近に残る鉱脈を観察すると、工具痕の明瞭な側に鉱脈が位置していることが窺え、二種の工具痕のうち、明瞭な工具痕を鉱脈の採掘痕であると判断した。

また、このトレンチよりも間歩入り口に近いトレンチ壁面の岩盤で観察された工具痕は、弧を描くように上方から前方下方へ用いられた状況が観察された。この痕跡も一回の掘削に対する痕跡が明瞭であった。

この工具の使用方向の相違は、岩盤を水平方向に掘削するか、縦方向に掘削するかの違いであると想定される。

第6図 No.49断面平面図・立面図 (S = 1 / 60)





第7図 工具痕実測図( $S = 1/10$ )

### (3) 下層確認トレンチ

#### 【検出・掘り下げ状況】

下層の確認として、調査区北隅に5m×4mの範囲で掘り下げを行った。この部分は前年までの調査によって、堆積土を約50cm除去したところ、10cm～30cm大の石が平面形「L」字状に集積された形で出土した箇所である。

調査は、北東側の調査区壁によって土層の観察を行なながら層毎に除去して順次掘り下げた。

北西側では石を除去した段階で、固く締まつた暗黄褐色土の面を検出、土間面として利用されていたか、マンガン分の沈着によって硬化した面と判断された。この硬化面上には、周辺からの転落石と考えられる40cm大の石がいくつか堆積しており、部分的に石を除去し硬化面の断ち割りを行い下層を確認した。その結果、硬化面から15cm程で岩盤を検出した。岩盤は、周辺の露出した岩盤と同質であり、南北方向に掘形状に屈曲面が検出されたことから、岩盤加工の遺構が存在していると判断。土層観察用の畦を残して岩盤を検出するように掘り下げた。

岩盤掘形から深さ150cm下がったところで、遺構底面を検出し、岩盤加工遺構と確認した。底面には木炭化した柱状の木が岩盤を穿って立てられていた。

岩盤底面はさらに東側に続いており、南北方向に残した土層観察用の範囲まで掘り広げた。

岩盤底面南側は、調査区端から約150cmにて立ち上がり、土層観察によって、硬化土層による遺構の壁面と確認した。

南北方向の土層観察用の畦を検査したところ、北側に向けての堆積方向が観察され、岩盤加工遺構が埋没したのちに、新たに掘り込みが行われている状況が観察された。

また、周辺の掘り下げによって、既に検出されていた礎石建物跡よりも層位的に古い時期の遺構を検出した。炉跡および、溝状遺構(SD02)、土坑(SK06)がそれで、他に礎石を2つ検出した。

これらの遺構が検出された面は、調査区西端

から東側に向けて4mの範囲は、ほとんど水平であるが、北東から南西方向に残した土層観察用畦付近で断面「へ」字状に東に向かって下がっていた。

この面の上に、礎石建物の基盤となっていた黄色や桃色の粘土ブロックを多く含む層が堆積していた。

#### 【炉跡】

下層確認トレンチより西側では、粘土を「口」字状に敷き、その内側に炭化物を充填している遺構を1基検出した。平面形での規模は、30cm×35cmを測る。掘り下げは行っていない。

#### 【溝状遺構】

溝状遺構は、石が集積された層を除去した段階で検出された、西側の調査区端から東方向に走り、断面形は緩い「V」字形、検出面からの深さは最大で34cmを測る。

#### 【土坑】

下層確認トレンチ西壁沿いで検出された。検出面からの深さ26cmを測る。調査区西壁まで土坑の半分を検出している状態で検出されたため、平面形は不定形であるが、長軸は20cmを測る。

#### 【岩盤加工遺構】

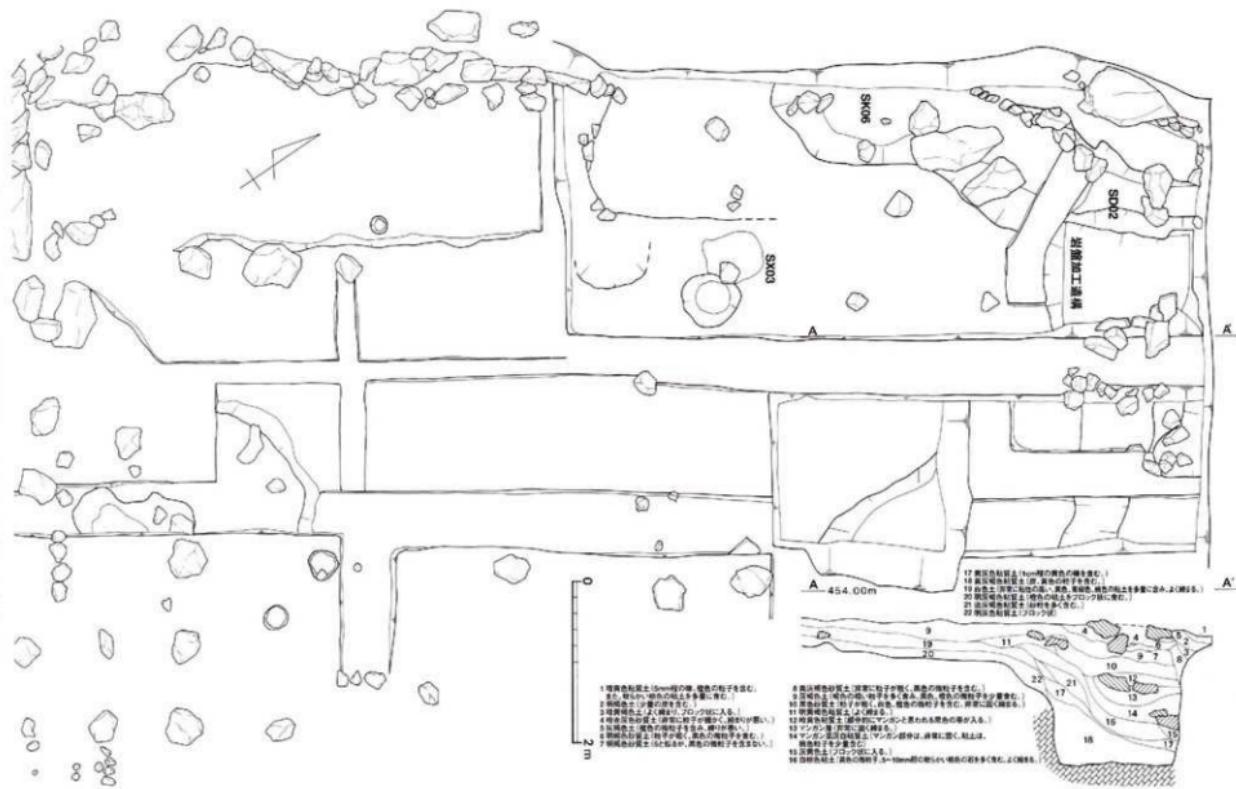
岩盤加工遺構底面に穴を穿ち直立させた状態で、木柱2本を検出した。2本とも炭化した状態で、北側の1本は、残存長28cmを測る。南側のそれは基底部が脆い状態であった。

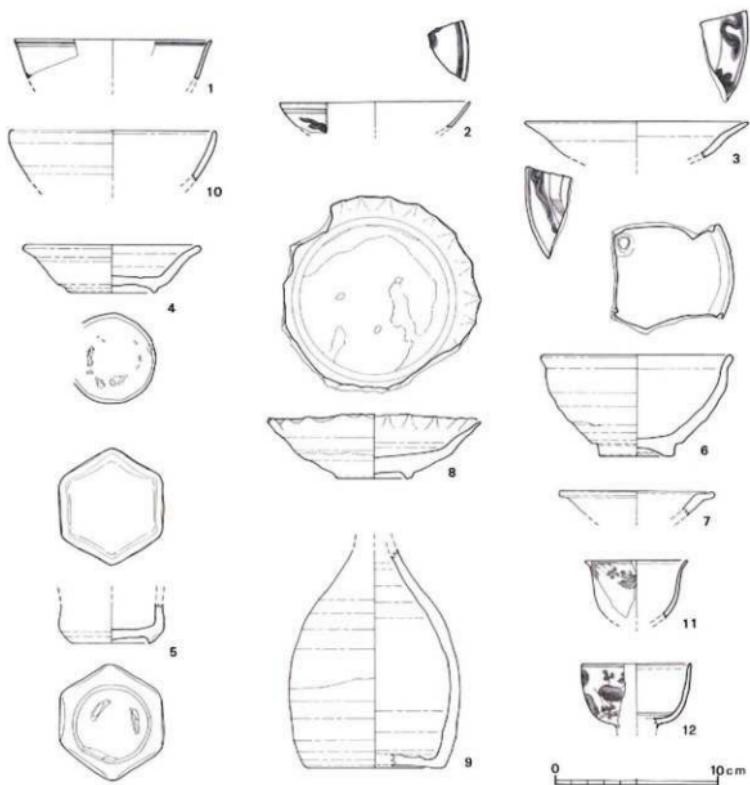
木柱間の距離は約90cmを測り、岩盤の加工面の基底部に平行していることから、岩盤加工に伴って構築されたと考えられる。

#### 【出土遺物・時期】

溝状遺構と土坑からは中国製青花が数点出土した。また、岩盤加工遺構埋土中からは、肥前系陶器、瀬戸美濃片が出土した。これらの遺物から、岩盤加工遺構及び周辺の遺構は、ほぼ同時期とも捉えることができ、概ね16世紀末頃と考えられる。

於紅ヶ谷地区出土遺物を第9図に示した。

第8図 下層解説トレンチ周辺平面図・土壌断面図 ( $S = 1/60$ )



第9図 於紅ヶ谷地区出土遺物実測図 (S = 1/3)

辨別 番号	出 土 地 点	種 別	器 種	法 量(cm)			色 調	成形・調整・文様	備 考
				C I 径	器 高	底 径			
1	No.49四歩前トレンチ	輸入磁器	青花碗	(12.5)			透明釉		反転復元
2	下層確認トレンチ	輸入磁器	青花皿	(11.0)			透明釉		反転復元
3	No.49四歩前トレンチ	輸入磁器	青花皿	(13.0)			透明釉	精製	反転復元
4	下層確認トレンチ土間面	瀬戸・美濃陶器	丸皿	(10.0)	29	5.1	墨灰釉		反転復元
5	下層確認トレンチ土間面	瀬戸・美濃陶器	火入			(4.8)	灰釉: 淡黄色		豊臣前期 反転復元
6	下層確認トレンチ土間面	瀬戸・美濃陶器	天目碗	(11.0)	6.2	(4.0)	铁釉		反転復元
7	下層確認トレンチ土間面	瀬戸・美濃陶器	皿	(9.3)			灰釉: 淡綠色	折縁反ぎ皿	反転復元
8	No.49四歩前トレンチ	肥前系陶器	皿	(13.0)	39	4.7	灰釉: 茶褐色	胎土目	C(c) 1a類・反転復元
9	西壁土附断面中上層	肥前系陶器	瓶	(10.0)		(8.2)	長石釉		反転復元
10	礫石付物(瓶)	肥前系陶器	瓶	(12.5)			灰釉		反転復元
11	水路トレンチ下層	肥前系磁器	小杯	(6.2)			淡藍緑色		反転復元
12	水路トレンチ下層	肥前系陶器	小杯	(6.7)			透明釉	花島文	反転復元
									ITC前～中頃 反転復元

第1表 於紅ヶ谷地区遺物観察表

## 第4章 竹田地区の調査

### 第1節 調査の経過と概要

竹田地区の調査は平成11年度から開始された。先に述べたように、調査の主たる目的は、仙ノ山山頂付近で石銀地区よりも東に位置していて、尾根を削平して整地された平坦地群の様相を明らかにすることであった。

調査は平坦面の踏査から開始し、平坦面群がいくつかのまとまりを示すことを把握、第1から第5平坦地群に区分けした。

発掘調査は第1の平坦地群から着手し、平成11年度は第1平坦地群の中央に位置する尾根に「十」字状に幅1m、長さ20mトレンチ（1区1トレンチ）を設定、掘り下げた。調査の結果、上層は近世初頭～前期頃の遺構、遺物が主であった。トレンチの北側を下層確認のため掘り下げたところ、上層から遺構面で4面を数えたところで、粘土貼りの方形の遺構などを検出した。その後、中央の尾根の十字トレンチの南西方向の区画を面的に掘り広げた。

平成12年度は、十字のトレンチの東全域及び南西区画を調査区、「I区」として設定。十字トレンチの東側を南北方向に拡張し調査を行った。検出された遺構は、17世紀中頃の時期と見られ、溝跡や、掘立柱穴、あるいはユリカスの堆積や、ズリが投棄された土坑などを検出した。十字トレンチの北西部（I区NW区）は、前年に方形の粘土貼り遺構を確認していた場所であったため、精査を実施。水路を作ろう土坑の他に、掘立柱穴、直径が10cm程の小型炉などを検出した。

また、I区北側の一段低い平坦地をII区とし、幅1mのトレンチ（2トレンチ）を設定、幅50cmのサブトレンチにて下層の確認を行った。

さらに中央の尾根（I区）からほぼ同じレベルで南西方向に伸びる箇所に新たに「I区3トレンチ」として幅1mでトレンチを設定し掘り下げた。

調査の結果、I区NW区の下層確認においては、方形粘土貼りの遺構内の土を科学分析し、銀、鉛が検出され骨片も確認されたことから、灰吹炉の可能性が指摘された。

方形炉周辺の出土遺物は、中国製青花と瀬戸美濃といった組成を呈しており、16世紀末以前の様相であることから、追加調査の必要性が指摘された。

平成13年度は、I区から10mの比高差で南に位置している平坦面にも十字にトレンチを設定し「III区」として掘り下げた。

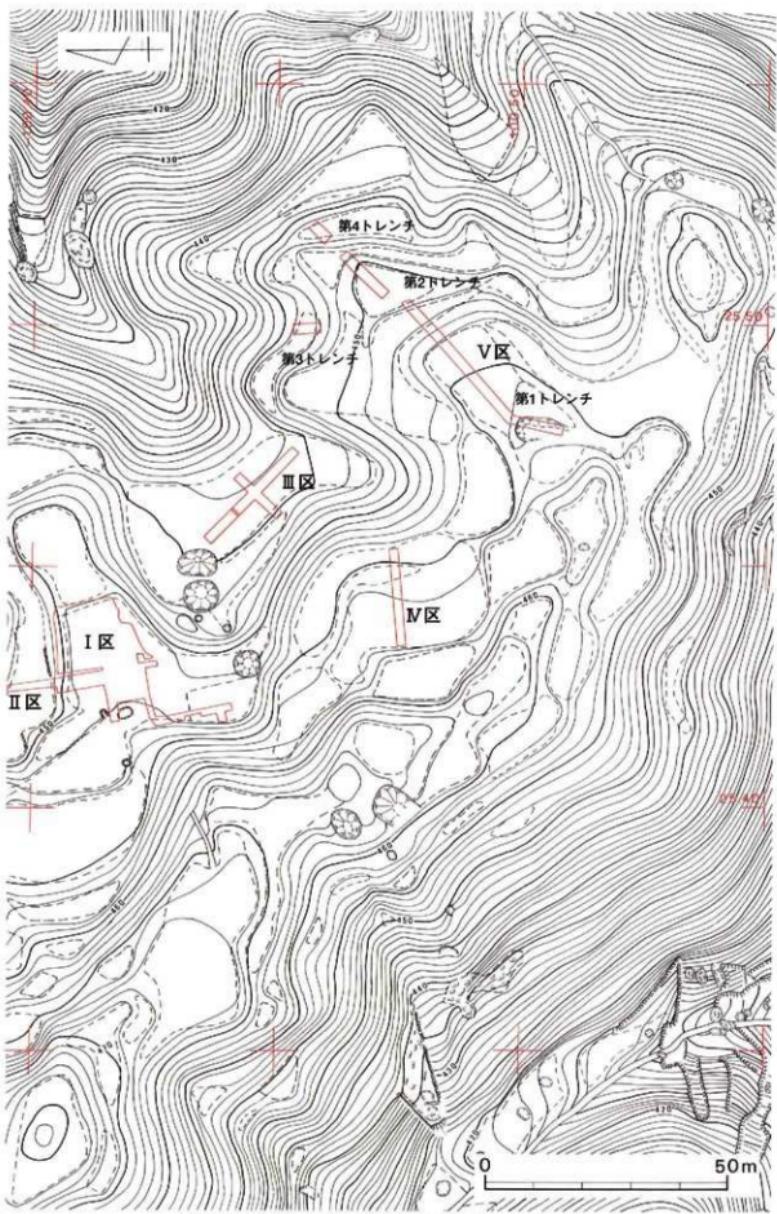
また、前年に灰吹炉の可能性が指摘された方形粘土貼り遺構は、「方形炉」と称され、その周辺を確認するために、I区NW区を幅3mに拡張、「I区下層確認トレンチ」として第3面まで掘り下げた。

トレンチ内からは、マンガン鉱石や純度の高い鉛塊が出土し、薬形分銅等の遺物も出土した。また、滴下金属の付着した石が検出され、科学分析の結果、マンガン分が認められた。これらの調査結果から16世紀末以前の銀製錆の具体的な一端を探る資料となると判断され、方形炉の面まで周辺を掘り下げることが必要であるとされた。

こうした調査経緯と成果に立脚して、平成14年度は、I区下層確認トレンチでは、方形炉の面と見られていた第4面まで掘り下げを実施した。これに併せて、平成11年度に掘り下げられていた平坦面先端の断ち割りで、第4面以下の下層を確認した。

また、第3の平坦地群及び第4の平坦地群に新たにトレンチを設定し、それぞれ第3平坦地群をIV区、第4平坦地群をV区として調査した。

以下、その3つの調査箇所について概要を述べる。



第10図 竹田地区トレンチ調査区配置図 ( $S = 1/1,000$ )

## 第2節 竹田地区の遺構と遺物

### (1) 竹田I区下層確認トレンチ

#### 【掘り下げ・検出状況】

I区NW区として、3×4mの範囲を下層確認のためにトレンチにて掘り下げた。前年度までに表土下80cmを掘り下げ、第3面を除去しつつある段階まで調査が行われていた。掘り下げは、上層での方形炉（S X14）など、部分的に遺構を残し行われていた。したがって、今年度の調査着手時で検出されていた第4面は、平成11年度に方形炉が検出された幅1mの部分であった。

今次調査は、各土層を再び観察し、どの部分がどの状態まで掘り下げられているのか、現況を把握することから開始した。

土層観察の結果、前年度の調査に付加する形で、いくつかの上面からの掘り込みが観察された。そのため、上層からの遺構を判別しながら、新しい遺構から順に掘形を確認した上で、層毎の掘り下げを実施した。

北壁の土層観察によって、幅90cmの第2面からの掘り込みが確認された。また、南壁の土層でも同様に第2面からの掘り込みが観察されることから、土層壁にしたがって掘り下げたところ、柱穴と判断された。

壁面で確認された柱穴の底面より下で第4面を再確認。この第4面を広げるようにトレンチ底面の土層を層毎に除去したところ、方形炉周辺で厚さ3cmの炭化物層と、厚さ5cm程のズリ堆積層が確認された。

第4面の堅緻な面上にこの二つの層が盛り土されたようにあることから、再度土層観察用の畦を方形炉を中心に設定し、二つの層の除去を行った。南側から第4面を検出するように、二つの層を除去していくところ、第4面上に板状の鉄片が出土した。

方形炉周辺では二つの層がやや厚くなってしまい、小トレンチで断ち割ったところ、3基ある方形炉のうち、新しく構築された方形炉は、二つの層の上面に伴っていて、検出を行っていた

第4面の堅緻な面上に伴わぬことを確認した。

従って、方形炉は第4面の硬く締まった面上最初の掘り込みを行い、この用途が終わった段階で、若干土間を削り込み、薄くズリ層等で埋め立てて次の方形炉を構築したことが明らかとなった。ゆえに3基が連続して掘り込まれているように観察されたのは、薄い埋め立て層を除去し検出した状態であり、方形炉が機能する段階では、3基の内のそれぞれ1基のみが現れていたことが推察される。

第4面の堅緻な面をさらに掘り広げたところ、方形炉西側で第4面に伴う柱穴を検出した。さらに北壁側から掘り広げたところ、柱穴が第3面、第4面それぞれから掘り込まれている状況を確認した。

北壁に伴う掘り込みはトレンチ西壁まで掘り広げたが、第3面の方形炉が掘り残してあったため、この部分について掘り広げることを止め、下層確認トレンチの第4面としては、「L」字状となつた。

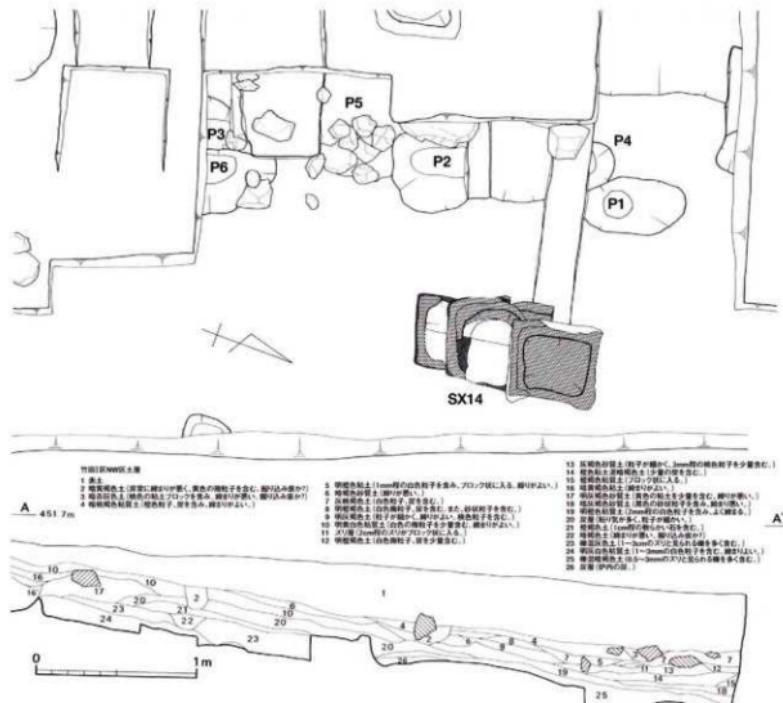
第4面より下層の状況は、トレンチ北端の断ち割り部分を精査し、以下のように観察した。

第4面より下位となる層には、よく締まる黄色粘土や橙色上の層が2層確認でき、それぞれに炭化物層を伴うことや、堅い面であることから遺構面と判断された。

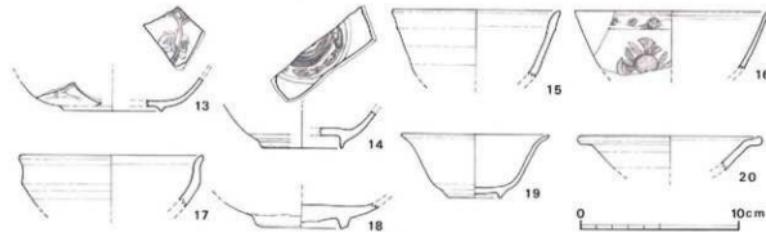
#### 【柱穴】

検出された柱穴は合計7基である。第3面に伴う柱穴は、P1、2、3、第4面に伴う柱穴は、P4、5、6である。このうち完掘を行ったP2は検出面からの深さ45cmを測り、埋土は黄色ブロック土、暗褐色土などで、柱穴の底面には石などは検出されなかった。

柱間距離は第3面のP1-P2-P3がそれぞれ130cm、125cm、P4-P5-P6はそれぞれ120cm、100cmである。柱穴の配置から窺える建物の構造については、下層確認トレンチがI区のテラスの北端に配置してあることから、この場所を建物の端部と捉えることもできようが、トレンチによる確認調査であるため、今後



第11図 竹田I区トレンチ平面図・土層断面 (S = 1/30)



第12図 竹田I区出土遺物実測図 (S = 1/3)

探査番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
13	NW区内	輸入磁器	青花斑		(6.2)	透明釉			反転復元
14	S X14c に伴う整地層	輸入磁器	青花斑		(5.1)	透明釉			反転復元
15	NW区内	肥前系陶器	丸碗	(10.0)			鉄釉: 茶色		反転復元
16	S X14c に伴う面	輸入磁器	青花碗	(12.2)			透明釉		反転復元
17	S X14c に伴う面	漁戸・美濃陶器	天目碗	(11.0)			鉄釉: 茶黒褐色		反転復元
18	NW区内・第3面～第4面	不明陶器	皿			5.0	透明釉		
19	S X14c に伴う整地層	輸入磁器	小杯	(9.2)	4.0	(3.2)	釉: (P)透明釉 (S)酒蓝色		反転復元
20	NW区内・第3面～第4面	漁戸・美濃陶器	皿	(11.0)			灰釉: 淡黄色		反転復元

第2表 竹田I区出土遺物観察表

の課題である。

#### 【方形炉】

第4面の方形炉（S X14）の検出、掘り下げ状況について、以下に記しておく。平成11年度に検出し、平成13年度までの調査で3基の方形炉が確認されていた。今次調査で、検出面の再精査と追加の掘り下げ、断ち割りを行った。

まず、検出面での状況であるが、3基の炉跡が重複しているため古い順にS X14a、S X14b、S X14cとした。

S X14aを第4面の堅敏な面にそって精査したところ、隅丸状に把握されていた粘土がほぼ直角に曲がり、粘土の外側に幅1cmの炭化物層を確認した。同様にS X14bも精査によって、粘土帯は性質の異なる粘土を2層用いていることと、明瞭な掘形を確認した。この時点で、S X14cがS X14a、14bの上面を覆う黒色土にともなって構築されたことを確認した。また、S X14cを構築する時点では、S X14a、14bの上面が削られ整地されていることを観察した。

S X14cが最終段階で、埋め立てて構築されていることで、昨年度報告された際、炉跡の掘形が検出されず、粘土のみを検出、表現してあることは、この理由が考えられる。

掘り下げは炉内土より開始した。過年度の調査によって既に、S X14cについて科学分析用に炉内土が採取され半裁されていたため、S X14bから炉内を層毎に掘り下げた。

S X14bの上層には、厚さ3cm、淡茶色から黄灰色を呈する層がみられた。この層は、S X14cを構築する際に埋め立てられた土と考えられる。

S X14bの炉内土は暗黒色の炭化物層である。この層には3~5mmの大白色片を含んでいる。層としての締まりは良く、炉内土として充填されたとみられる。炭化物層であるが、木炭片の集まりではなく細粉化し若干の粘質を帯びる。

粘土は2つに分離された。いずれの粘土もよく填圧されており、粘土1は、粒子がやや粗く炉内側に貼付される形態を呈した。粘土2は、

粘土1の外側に粘土1より厚く充填されていた。

S X14bの炉内を半裁した後、S X14aの炉内を掘り下げた。S X14bの炉内土と同じように上下2層に分離された。

S X14cは、3基のうち最後に構築された方形炉である。既に半裁が行われていたが、科学分析の汚染状況の対比資料として再び掘り下げを行った。

炉内土は3層に分離され、上層が黒色土、中層が暗褐色土である。上層を掘り下げたところ、白色片がまばらに含まれていた。

粘土を断ち切って土層断面を観察すると、粘土は上面から逆三角形に充填しており、断面を逆台形に掘りくぼめて、粘土を上面にかけて肥厚され、粘土で形成された炉跡の内壁立ち上がりが垂直になるよう構築された方法が確認された。

S X14Cは粘土が二種類用いられている。外側の粘土は石英などの細かい砂粒を若干含み、締まりのある粘土である。これに対して内面の粘土は水で漉されたような均質で細かく粘質のある粘土が充填してあった。

外側の粘土の平面形は「コ」字状で、炉のまわりを全周していない。これは外側粘土が残っていた状態から新たに内側粘土を充填するための掘りくぼめが行われたため、と推定される。しかしながら外側、内側の粘土の質の違いがあることが、粘土充填の手法であることの可能性も否定できない。ただし炉跡周辺には、炉内土と同じような骨片と思われる白色片を含んだ黒色土が見られたことから、炉の役割が終わった段階で炉を壊し炉内物をかき出したことも想定され、粘土が充填されなおしたと判断しておきたい。

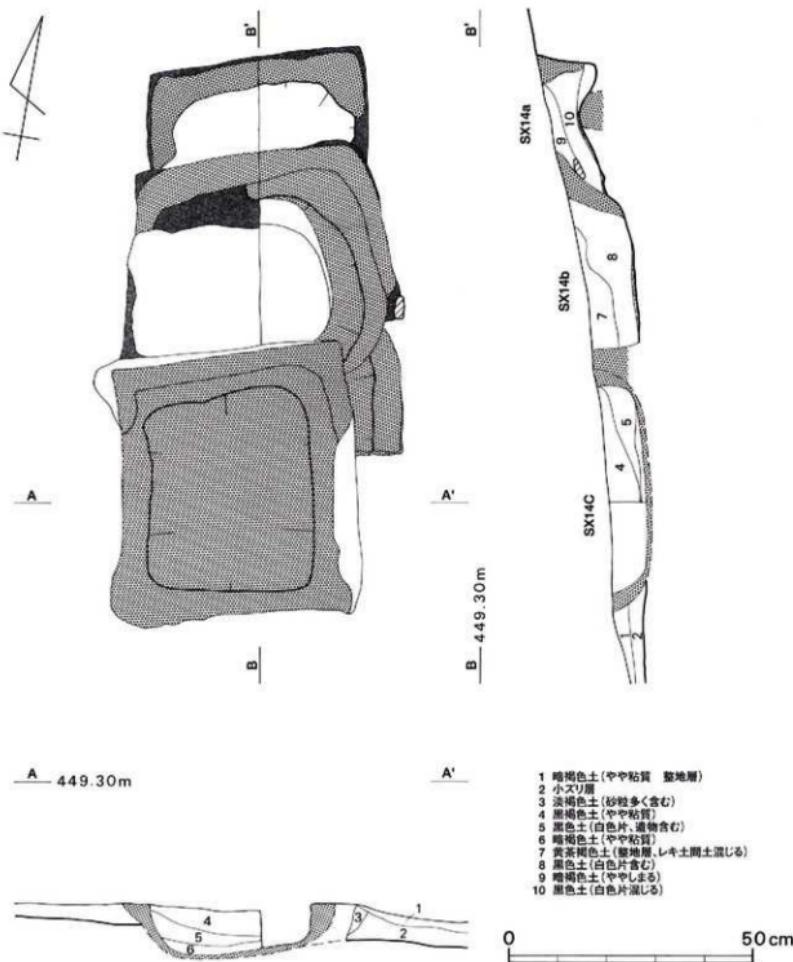
また、S X14bに対しては外側粘土がほぼ垂直に立ち上がっていた。断面が逆三角形になる状態と、垂直に立ち上がる状態が確認された。

これは、単に直線的に掘形を形成したものか、あるいは板状のものを粘土構築の際に用いたとも考えられる。

【竹田 I 区出土遺物】

下層確認トレンチの遺物を第12図に示した。  
 13、14、16は青花。15は肥前系の陶器である。  
 17、20は瀬戸美濃。18は陶器で見込みを釉剥ぎ。  
 19は磁器で、外面に濃藍色の釉を施す。方形

炉 S X14c を構築するために S X14a、b を埋めた土層から、出土した遺物は 14、19。S X14c の面に伴う遺物が 16、17。他は、第 3 面の構築土以下からの出土である。



第13図 竹田 I 区SX14平面図・断面図 (S = 1 / 15)

## (2) 竹田IV区

竹田IV区は、竹田地区とした平坦地群のまとまりの中でも中央の部分で、北側にⅠ区Ⅱ区、東側にⅢ区、南側にV区という位置関係にある。

調査前現況は竹林で、平成13年度にこれを伐採し今次調査に際して、人力で整理、除去を実施した。竹林除去後に地表面を観察し、20m×40m規模の平坦面が中央にあり、それを取り巻くように幅3～5mの平坦面が北方から東側に広がっている。中央の平坦から西側は比高差2mで20m×10mのテラスがあり、その西側は竹田地区と本谷との尾根部分となっている。

今回設定したトレンチは、中央の最も大きな平坦面を東西方向に任意で幅2mとして配置した。これは、IV区の中心部分から状況を確認することを目的としたことが理由の一つであるが、平坦面毎の単位がどのような土地利用をされたのかを探るため、広い平坦面をほぼ横断するトレンチを設置することが適当と判断されたためである。

掘り下げは、地表面に既に凹凸が見られたため、遺構面までの深さが浅い可能性が考えられ、表土から土層を観察しながら層毎に削り下げた。

第1層は、締まりの悪い橙褐色土、最も厚いところで50cmを測り、平坦面全体をまんべんなく覆っていた。

この層を除去したところ、トレンチ中央付近で明色の粘土質の層が検出されたが、西側では黄色粘土ブロックを混入するやや締まった層を確認。東側では暗褐色を呈する硬く締まった面などが検出された。それぞれに遺構検出を試みるために精査を行ったところ、中央部分の粘土質土は厚さ数cmで部分的に炭化物層などと互層になるなど人為的に盛り土された形跡を確認した。遺構は酸化被熱した部分や、炭化物を充填したと見られる平面形が円形となる炉跡と推定されるもの、あるいは、鉄鋸分がまとまっていいる箇所などを検出した。

西側では、遺構が確認されないため、横方向に土層観察用の畦を残し、中央の整地土層を掘

り広げる形で黄色粘土ブロック混入土を除去した。東側では、硬化面の精査や、部分的に断ち割りをおこなった。

結果、西側に向けても粘土の整地層が広がってはいたが、部分的に認められない箇所もあり、これも部分的に断ち割りを行って層位を確認した。掘り下げる過程で出土した遺物は、写真撮影後は高さと層序、位置を記録した。

合計4層を剥いだが、なお遺物包含層が続き、地山面に到達し得なかったため、この平坦地が地山を削りだしたのみで構築されたのではなく、周辺の地形変更による土砂を盛土、填圧し構築されたと判断した。

中央部分の遺構集中箇所にて確認していた鉄鋸分のまとまりの箇所を掘り下げたところ、鉄製品の破片が相次いで出土した。破片の位置関係から、鉄鋸分を発生させた箇所の中心を精査したところ、鉄の薄い板状のものが円形に検出され、容器状の鉄製品と断定。鉄鍋と推定された。遺物取り上げ後、X線撮影によって、片口のつく鉄鍋であることが確定した。

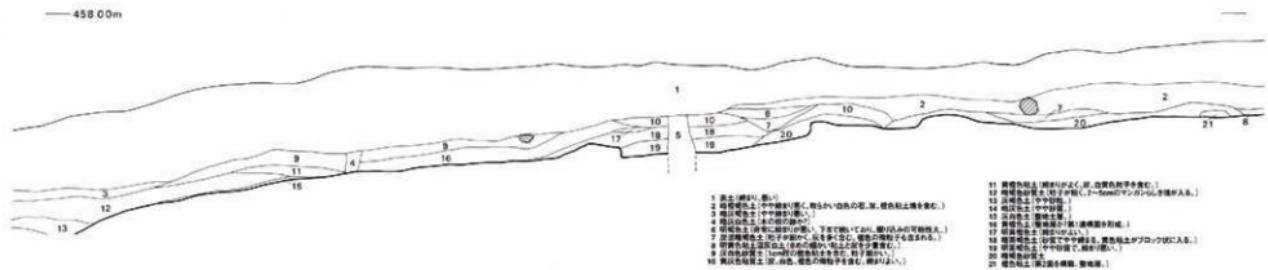
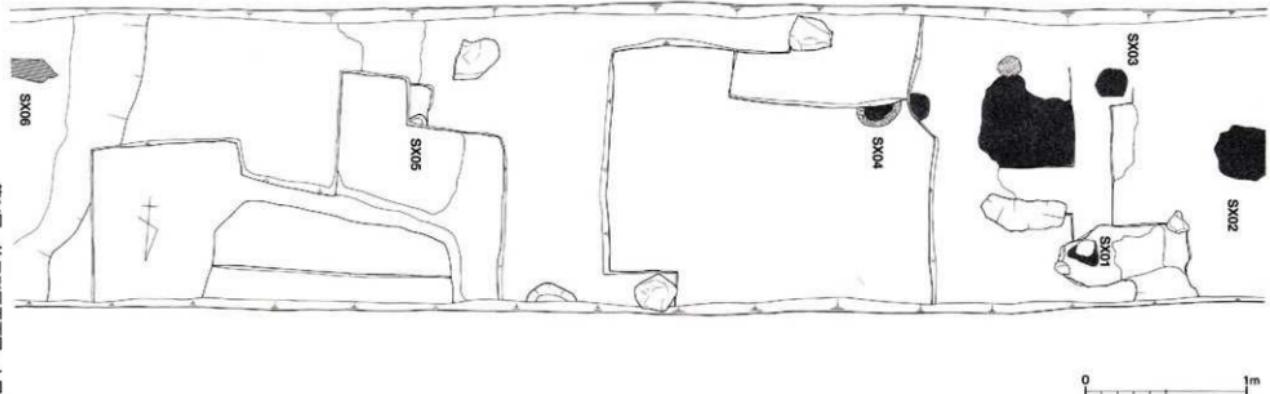
### 【炉跡】

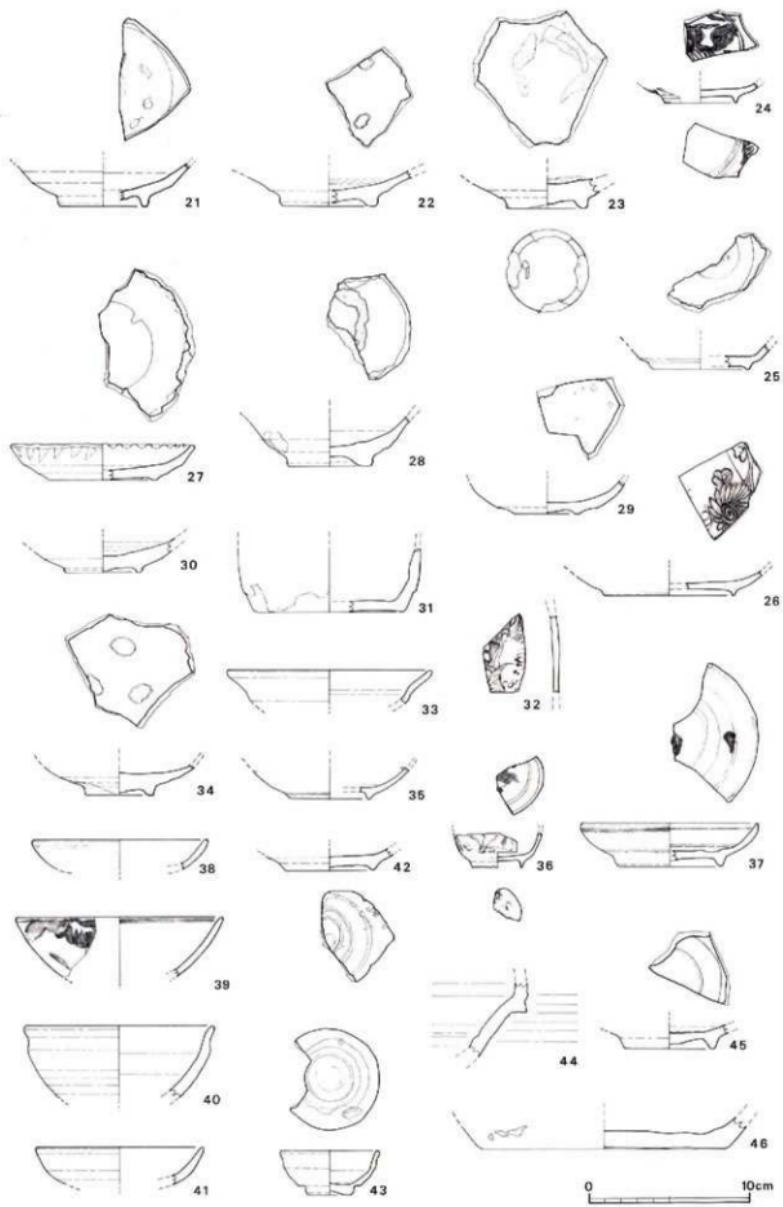
トレンチ内で炉跡と推定される遺構は、合計6基検出された。S X02～04はそれぞれ直径37cm、17cm、24cmの円形の平面形で、炭化物の充填が認められる。S X05は径10cmと小型で、周辺の土間さらに厚さ5cm程、硬く盛り土して掘りくぼめ構築されている。S X06は方形の粘土貼りの形状を呈する炉跡で、内部の掘り下げは行っていない。

### 【遺物】

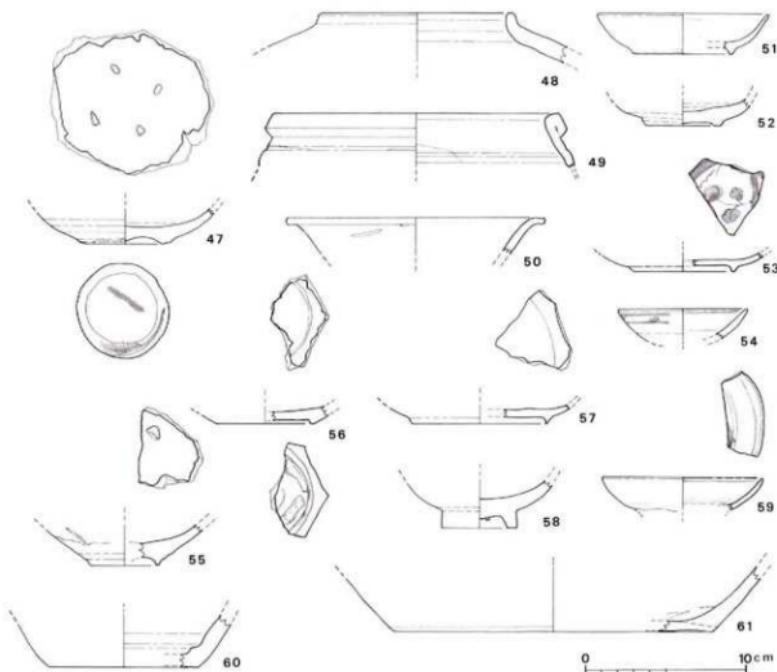
竹田IV区の出土陶磁器を第15・16図に示した。21は李朝、24、26、32、35～39、45、53、54、59が青花、25、27、40～43、56が瀬戸美濃、51、57が肥前系磁器、44、60は備前、その他は肥前系陶器である。

第14回 竹田IV区平面図・土壌図 (S=1/30)





第15図 竹田IV区出土遺物実測図① (S = 1/3)



第16図 竹田IV区出土遺物実測図② (S = 1/3)

排列番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
21	第2造構面	輸入陶器	皿			(5.4)	灰釉：(外)淡灰褐色 (内)淡茶褐色	胎土目	反転復元
22	第1層	肥前系陶器	皿			(5.2)	灰釉：(外)肌色 (内)淡绿色	胎土目	A1b類 反転復元
23	第1層	肥前系陶器	皿			(5.1)	灰釉：淡綠色		反転復元
24	第2層	輸入磁器	青花皿			(4.4)	透明釉	交織文	精製 反転復元
25	第1層	瀬戸・美濃陶器	皿			(6.0)	灰釉：淡黃色		反転復元
26	第2造構面直上	輸入磁器	皿			(8.0)	透明釉		反転復元
27	第2層	瀬戸・美濃陶器	皿	(11.2)	22	(6.6)	灰釉：淡緑色		反転復元
28	第1層	肥前系陶器	皿			(5.1)	灰釉：淡緑色		B2b類 反転復元
29	第1層	肥前系陶器	皿			(4.0)	灰釉：淡緑灰色		C(a)1a類 反転復元
30	第1層	肥前系陶器	皿			(4.5)	灰釉：(外)淡粉色 (内)淡绿色		A1b類 反転復元
31	第1層	肥前系陶器	水指			(9.0)	灰釉の上白釉		反転復元
32	第2造構面以下焼地刷	輸入磁器	青花皿				透明釉		
33	第2造構面以下焼地刷	肥前系陶器	皿	(12.6)			素灰釉：白色		B1a類 反転復元
34	第2造構面以下焼地刷	肥前系陶器	皿			(4.2)	灰釉：淡灰綠色		C(a)1b類 反転復元
35	第2造構面以下焼地刷	輸入磁器	青花皿			(4.8)	透明釉		反転復元
36	第2層	輸入磁器	青花小坪			(3.0)	透明釉		反転復元
37	第2造構面以下焼地刷	輸入陶器	青花皿	(11.0)	27	(6.3)	透明釉	蛇ノ目釉剥ぎ	精製 反転復元

第3表 竹田IV区出土遺物観察表

38	第2道構面以下整地層	輸入陶器	皿	(10.6)		透明釉		粗質 反転復元
39	第2道構面以下整地層	輸入陶器	青花碗	(12.8)		透明釉		粗質 反転復元
40	第2層	瀬戸・美濃 陶器	天目碗	(11.2)		鉄釉：黒茶褐色		反転復元
41	第2道構面以下整地層	瀬戸・美濃 陶器	皿	(10.3)		灰釉：淡灰色	貫入	反転復元
42	第2道構面以下整地層	瀬戸・美濃 陶器	皿		65.4	灰釉：緑灰色		大室第4段階(文 慶長期)、反転復元
43	第2道構面以下整地層	瀬戸・美濃 陶器	小坪	(6.6)	27	27	鉄釉：黒褐色	反転復元
44	第1層	備前系陶器	鉢				釉：無釉(茶褐色)	
45	第2道構面以下整地層	輸入陶器	皿		65.6	墨灰釉：乳白色		反転復元
46	第2層	土師質土器	鉢			(15.0)	露胎：(外)黒褐色 (内)淡灰色	反転復元
47	斬ち割り内	肥前系陶器	皿			64.8	墨灰釉：白灰色	胎土目 Q2期 反転復元
48	トレンチ内	土師質土器	甕	(11.9)				反転復元
49	第2道構面以下整地層	肥前系陶器	甕	(17.6)		灰釉：緑褐色		反転復元
50	第1層	肥前系陶器	片口	(16.0)		灰釉：緑灰色		反転復元
51	第1層	肥前系陶器	皿	(10.6)	2.5	(6.2)	釉：透明釉	砂目 反転復元
52	第2道構面直上	肥前系陶器	皿			64.6	灰釉：淡緑灰色	C(a) 1a類、反転復元
53	第1層	輸入磁器	青花皿			64.4	透明釉	反転復元
54	第1層	輸入陶器	皿	65.0			透明釉	粗質、反転復元
55	第2面	肥前系陶器	鉢			64.2	灰釉：濃緑色	三日月高台 反転復元
56	第2道構面以下整地層	瀬戸・美濃 陶器	皿			65.9	灰釉：淡緑色	反転復元
57	第2層	肥前系陶器	皿			64.4	透明釉	反転復元
58	第1層	不明陶器	鉢			64.7	灰釉：淡黄褐色	反転復元
59	第3層、No.199、第1~2面	輸入陶器	青花皿	(10.0)			透明釉	反転復元
60	第2面直上	備前系陶器	鉢			69.2	暗赤褐色	反転復元
61	第1層	肥前系陶器	甕			69.6	灰釉：暗緑色	反転復元

第3表 竹田IV区出土遺物観察表

### (3) 竹田V区

竹田V区は、竹田地区とした平坦地群のまとまりの中でも南に位置し、東方向に延びる尾根を中心とした平坦地群である。

竹田IV区と同じく調査前現況は竹林で、平成13年度にこれを伐採、今次調査に際して人力で整理、除去を実施した。

竹林除去後に地表面を観察し、中央の尾根から一つ下段の平坦地まで1トレンチ、東方向に下がる毎に2トレンチ、4トレンチを設定。2トレンチの北側小谷に3トレンチを、いずれも幅2mで配した。

また、中央の尾根の西側にある窪地に対してトレンチを拡張、掘り下げを行った。

掘り下げたところ、1トレンチでは表土以下、黄灰色粘土質土、以下茶褐色の砂粒の大きい茶褐色砂質土、淡灰黄色土が見られ基盤となる黄土質の地山を検出した。遺構は検出されず、

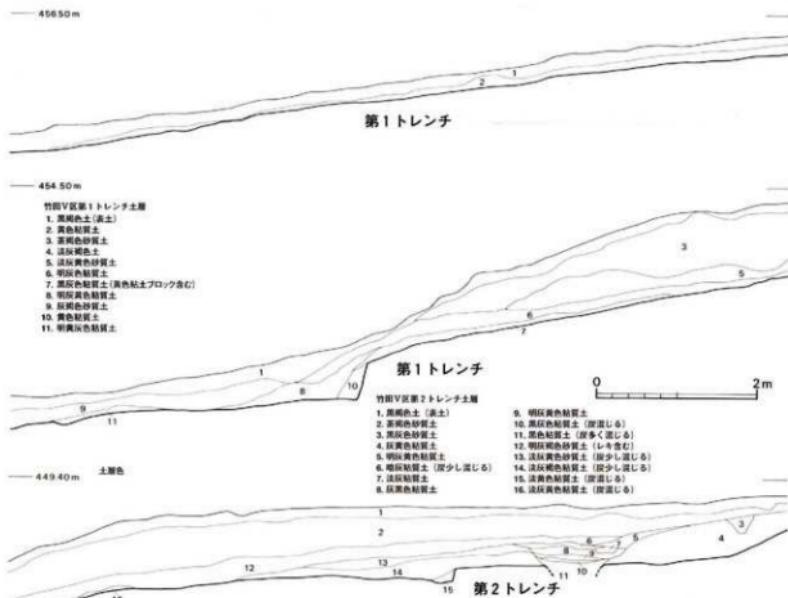
茶褐色土、淡灰黄色土から遺物が出土した。

同様に2トレンチでは、表土下、茶褐色砂質土、地山という層序であった。部分的に木根に起因する黒灰色土が見られた。

3トレンチでも表土下、茶褐色砂質土、黄灰色粘土質土、黒灰色土、地山の黄色粘土であった。

4トレンチも同様な層序を示し、結果として製錬造構や建物跡は検出されなかった。

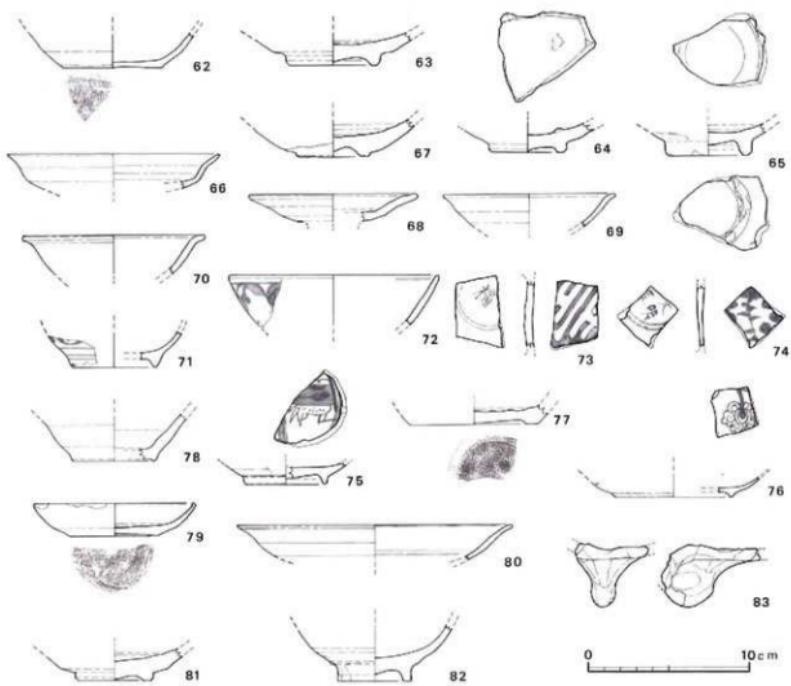
竹田V区の出土遺物を第18図に示した。62は底部切り離しを糸切りによる。



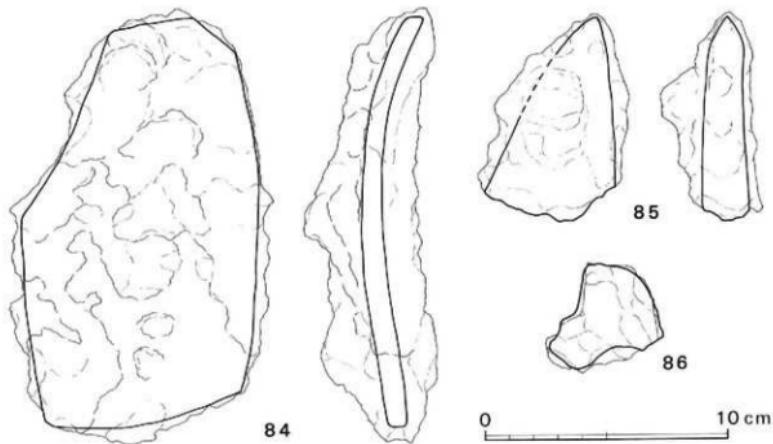
第17図 竹田V区土層図 (S = 1/60)

横断番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
62	第1トレンチ	須恵器	皿		(6.2)	明灰色	回転条切り	反転復元	
63	第2トレンチ第1層、表土	肥前系陶器	皿		(5.4)	墨灰釉: (外)乳白色 (内)濃灰色		A2b類 反転復元	
64	第1トレンチ第2層	肥前系陶器	皿		(4.4)	灰釉: 淡黃褐色	胎上目	B2a類 反転復元	
65	第2トレンチ、表土	肥前系陶器	皿		(4.7)	透明釉		17C前半 反転復元	
66	第1トレンチ第2層	不明磁器	白磁皿	(12.0)		透明釉		反転復元	
67	第2トレンチ、表土	肥前系陶器	皿		(4.6)	墨灰釉: 茶褐色		A2a類 反転復元	
68	第1トレンチ第2層	輸入陶器	皿	(10.2)		灰釉: 淡灰色		反転復元	
69	第1トレンチ第2層	輸入磁器	白磁皿	(10.4)		透明釉		反転復元	
70	第1トレンチ第2層	輸入磁器	白磁皿	(11.0)		透明釉		16C中～後、反転復元	
71	第1トレンチ第2層	輸入磁器	青花皿		(5.1)	透明釉		16C中～後	
72	第2面上層	輸入磁器	青花皿	(13.0)		透明釉		反転復元	
73	第1トレンチ、第1層	輸入磁器	青花皿			透明釉	見达「寿」 高台内「福」		
74	第2面上層	輸入磁器	青花皿			透明釉	草本文	粗製、16C末～17C初	
75	第2トレンチ	輸入陶器	青花皿		(5.8)	透明釉		粗製、反転復元	
76	第2トレンチ第2層	輸入磁器	青花皿		(7.2)	透明釉		反転復元	
77	第2トレンチ第2層	陶器			(7.8)	無釉	ヘラ刻文字	反転復元	
78	第1トレンチ、下層	陶器	碗		(5.2)			反転復元	
79	第4トレンチ	土師質土器	灯明皿	(10.0)	20	(5.6) 漆刷: 淡黃色	漆付着	反転復元	
80	第2トレンチ第2層	輸入陶器	青花皿	(17.5)		透明釉		粗製、反転復元	
81	第3トレンチ、中層	肥前系陶器	皿		(4.4)	墨灰釉: 淡灰色		A2b類 反転復元	
82	第2トレンチ、表土	肥前系陶器	皿		(4.4)	透明釉		反転復元	
83	第2トレンチ	土師質土器	取手						

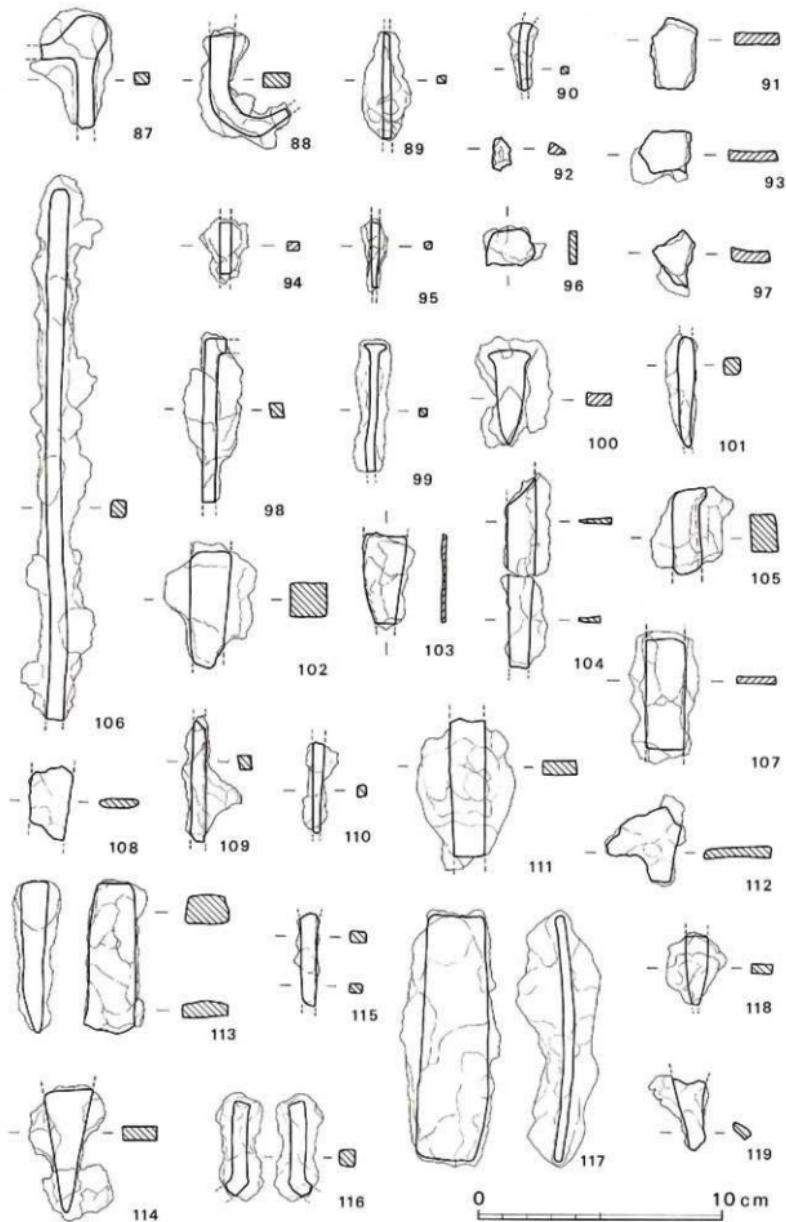
第4表 竹田V区出土遺物観察表



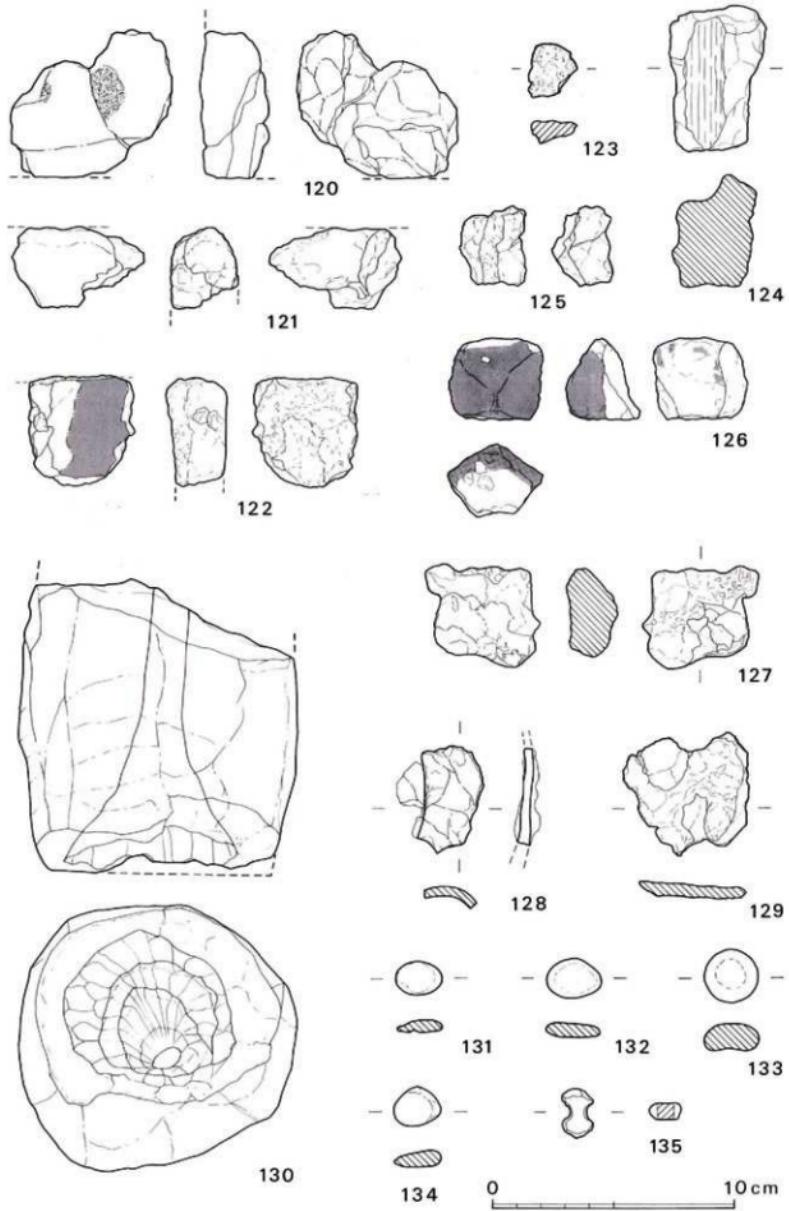
第18図 竹田V区出土遺物実測図 (S = 1/3)



第19図 竹田地区金属製品実測図① (S = 1/2)



第20図 竹田地区金属製品実測図② ( $S = 1/2$ )



第21図 竹田地区製鍊関連遺物実測図 ( $S = 1/2 \cdot 135$ のみ $1/1$ )

件名 番号	区分	出 土 地 点	種 別	器 種	法 量 (cm)			重 量 (グラム)	備 考
					現存長	幅	最大厚		
84	IVK	第2遺構面以下整地層	鉄製品		16.9	9.7	1.0	5820	
85	IVK	第2遺構面以下整地層	鉄製品		8.3	5.0	2.5	1887	
86	IVK	第2遺構面以下整地層	鉄製品		4.6	4.6		248	
87	IVK	第2層	鉄製品		5.0	2.9	0.5	343	
88	IVK	第2層	鉄製品		5.0	0.9	0.8	284	
89	IVK	第2層	鉄製品	釘	4.4	0.4	0.3	10.4	
90	IVK	第2層	鉄製品	釘	2.8	0.3	0.3	1.6	
91	IVK	第2層	鉄製品	板状	2.7	0.5	1.8	6.3	
92	IVK	第2層	鉄製品		1.4	0.5	0.7	0.7	
93	IVK	第2層	鉄製品	板状	1.7	0.4	2.0	7.5	
94	IVK	第2層	鉄製品	釘	2.1	0.4	0.5	6.9	
95	IVK	第2層	鉄製品	釘	2.7	0.3	0.3	2.1	
96	VTK	第3トレンチ, 中層	鉄製品		1.4	0.3	1.4	45	
97	IVK	第2層	鉄製品		2.4	0.7	1.6	30	
98	IVK	第1層	鉄製品	ガスガイ	6.7	0.5	0.6	23.8	
99	IVK	第2層	鉄製品	釘	5.2	0.3	0.3	9.1	
100	IVK	第2層	鉄製品	クサビ	3.9	0.5	1.0	26.4	
101	IVK	第2遺構面以下整地層	鉄製品	釘	4.6	0.7	0.7	4.9	
102	IVK	第2層	鉄製品		4.8	1.5	1.5	78.1	
103	IVK	第1層	鉄製品		3.8	1.8	0.3	7.5	
104	VTK	第3トレンチ, 上層	鉄製品	小柄	7.8	1.3	0.3	15.5	
105	VTK	第2トレンチ	鉄製品	棒状製品	3.3	1.0	1.5	36.9	
106	VTK	第2層	鉄製品	火箸	21.8	0.7	0.6	95.6	
107	IVK	第1層	鉄製品	板状	4.5	1.6	0.3	28.2	
108	VTK	第2トレンチ, 第2層	鉄製品	板状	3.1	1.6	0.4	40	
109	VTK	第1トレンチ, 第2層	鉄製品	釘	5.0	0.6	0.5	12.2	
110	VTK	第3トレンチ	鉄製品	釘	3.7	0.5	0.5	4.6	
111	VTK	第1トレンチ, 第2層	鉄製品	板状	5.6	1.4	0.6	59.1	
112	VTK	第1トレンチ, 第2層	鉄製品	板状	3.1	2.7	0.5	7.3	
113	VTK	第1トレンチ下層	鉄製品	クサビ	6.2	1.9	1.1	55.0	
114	VTK	第2トレンチ	鉄製品		4.6	1.6	0.6	34.3	
115	VTK	第3トレンチ, 第2層	鉄製品	釘	3.8	0.5	0.7	4.1	
116	VTK	第3トレンチ, 第2層	鉄製品	釘	3.8	0.6	0.7	13.5	
117	VTK	第3トレンチ, 第2層	鉄製品	板状	10.0	2.9	0.5	111.6	
118	VTK	第3トレンチ, 中層	鉄製品	釘	2.8	0.9	0.4	0.5	
119	VTK	第2トレンチ, 第2層	鉄製品	板状	2.9	0.8	0.4	5.6	
120	IVK	第2層	土製品	炉壁	6.1	6.6	2.8	80.7	
121	IVK	第1トレンチ, 第2層	土製品	炉壁	5.5	3.3	2.8	36.9	
122	IVK	トレンチ内	土製品	炉壁	4.6	4.4	2.6	46.8	
123	IVK	第3層	カラミ	カラミ	2.1	2.3	0.9	4.9	
124	IIIK	表採	土製品	羽口	5.9	4.0	5.0	96.2	口径23cm
125	VTK	第2トレンチ	土製品	炉壁	3.3	2.5	2.0	14.9	
126	VTK	第3トレンチ, 第2層	石		3.4	3.7	2.6	32.3	金属分付着
127	IVK	第1層	カラミ	カラミ	4.8	3.3	2.0	38.8	
128	IVK	第1層	鉄製品		4.2	2.5	0.4	16.2	
129	IVK	第1層	鉄製品	板状	4.9	5.6	0.5	29.5	
130	IVK	第1層	石製品		11.8	11.4	5.2	134.0	
131	IVK	第2層直上	石製品	碁石	1.9	0.5	2.0		
132	VTK	第2トレンチ	石製品	碁石	2.3	0.6	3.2		
133	VTK	第2遺構面以下整地層	石製品	碁石	2.3	1.1	8.5		
134	VTK	第2トレンチ, 第2層	石製品	碁石	2.0	1.6	3.2		
135	IVK	第2層	銅製品	分解	1.0	0.7	0.3	0.6	

第5表 竹田地区金属製品等観察表

## 第5章 出土谷地区の調査

### 第1節 調査の経過と概要

出土谷地区的調査は、平成9年度に開始された。平成9年度は第1トレンチ（約20m）、平成10年度では、第2トレンチ（約20m）、第3トレンチ（40m）を調査し、第1、第2トレンチを埋め戻した。

第1トレンチは、No.247間歩の前に東西方向へ約7m南北方向へ約3mにて設定。表土である厚さ20cmの褐色土を除いたところ、土間面を確認。炉跡S X01と性格不明造構S X02を検出した。土間面には他に要石が埋め込まれた状態で出土したといわれ、礎石もしくは埋め込まれた状態で使用されたものと考えられた。結果として、製鍊施設を持つ建物跡の一部と判断された。

第2トレンチは、第1トレンチと向かい合う平坦地に設定された。杉の植林をよけながら、「コ」字状に約20mのトレンチとして掘り下げた。表土である暗褐色土を10~20cm掘り下げたところ、褐色の整地層を確認し土間と判断された。土間面から、製鍊造構の可能性があるS X03および炉跡S X05を検出した。また、第3トレンチでは礎石と炉跡を確認し、次年度の調査に委ねられた。

平成11年度は、第3トレンチで確認されていた礎石建物跡の様相を確認するよう指導され、この時点で、第1・2トレンチをあわせて出土谷Ⅰ区とし、第3トレンチの平坦面と隣接する間歩を含めて出土谷Ⅱ区と呼称することとした。

調査の結果、表土下約15cmで土間面を検出し、礎石建物を良く残していた。建物に伴う製鍊施設を3基確認し、遺物から礎石建物跡は18世紀後半頃の製鍊施設であると判断された。建物廃絶後は、19世紀後半までズリ廃棄場として利用されていたことを確認した。また、下層確認によって、石垣を組んで平坦地を確保されていた状況や、出土谷の開発時期が遅くとも17世紀初

頭頃まで遡ることを明らかにした。

平成12年度は、ズリ廃棄場となっていた箇所のズリ堆積を除去した。掘り下げの過程で、ズリ堆積層の剥ぎ取りを行った。また、ズリ堆積の最下層付近では灰吹銀が出土した。

平成13年度はズリ廃棄場除去後の平坦面の精査と、付近に位置しているNo.247間歩との関連を調査した。結果、礎石建物跡とNo.247間歩が同じ時期に機能していたことが判明した。また、No.247間歩と建物との間に位置している水路、道が、数回にわたって造り直されていることも確認された。



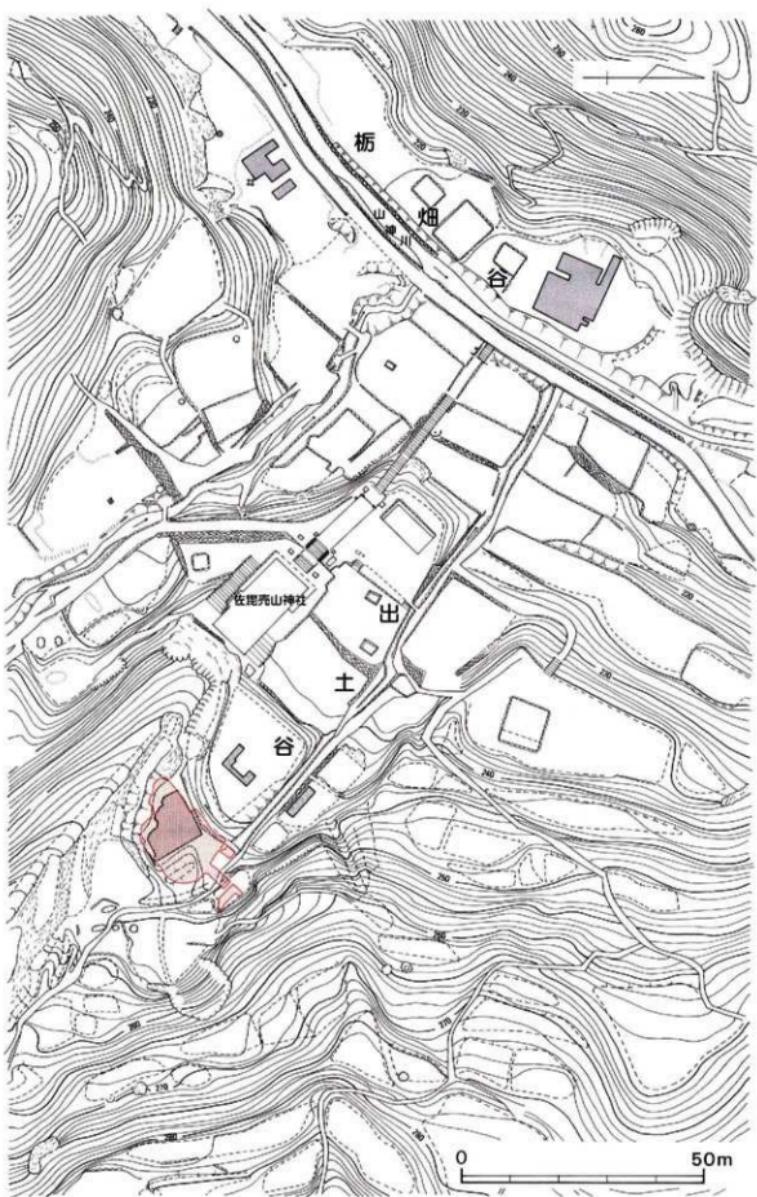
写真2 ズリの堆積

平成14年度は、このような調査結果を踏まえて、さらに礎石建物跡平坦面の精査及び水路と道跡の状況について確認する目的で調査を行った。

調査区は前年度の調査区と併せて新たに水路と道についてトレンチを設定した。

以下に報告する内容は、ズリ廃棄場の堆積状況と石垣の構築のされ方、No.247間歩前の状況と、水路、道跡のおよび周辺の岩盤加工の状況についてである。

この地区的調査は継続中であり、平坦面上の遺構の検討を含め、この章のみで調査の中途経過を報告し、まとめは次期の調査報告時に委ねる。



第22図 出土谷周辺地形図 ( $S = 1/1,000$ ) □:出土谷 II 区

## 第2節 出土谷地区的遺構と遺物

### (1) ズリ堆積と平坦面

建物跡東側に堆積していたズリを除去した。ズリ山の範囲は直径概ね8m、高さ4mで円錐状に堆積していた。掘り下げは、断面観察の必要があり、任意で北東から南西方向にラインを設定、ズリ山を半裁することとした。皮状に覆っていた表土の下から、ズリの堆積が確認され、ズリの大きさは6cm大が主であり、部分的に質な堆積が確認された。

最下層は桃灰色の細かくやや粘質の砂質土であった。最下層を精査した段階で灰吹銀が出土した。



写真3 灰吹銀

ズリを除去したところ、桃白色土の上面ないしは土中に、人頭大から50cm大の石が含まれていた。石と桃白色土を除く段階で灰吹銀が出土した。ズリの最下層も残るため、いずれかの層に含まれるものである。

この層を除去すると黒色に硬化した面や、黄色粘土が貼付されている面を検出し、建物跡の土間面と推定された。

粘土面、硬化面の精査を行ったところ、切石あるいは川原石を延べ石状に並べた石列が検出された。検出過程で石が列をなす方向に精査を試み、平面形が直線ではなく平坦面の中程で「コ」字状に屈曲している状況であった。

部分的に掘り下げたところ、石列は2段程度積んでおり、切石と河原石を併用していた。石列の上面は土間面を形成しているとみられたため、石列西側に粘土、石列の東側から北側にかけて硬化した面を検出した。

しかし、石列の上面より上の土層観察用の畦を検討したところ、硬化面は縞状に硬化沈着し

た状況がみられ、整地層ではなく上層からの堆積によって形成されたと判断された。

部分的に断ち割りによって掘り下げ、下層を確認したところ、灰黄色の硬い粘土質土が石列の基底のレベルに存在しており、北西から南東方向に畦を残し硬化面を掘り広げた。畦の東側は、精査したところ、硬化面からの土坑状の遺構があり、水路に近い石積みの基底部が硬化面上層のレベルよりもわずかに下がった高さから積まれていた。したがって、硬化面の上面と、石列の基底の面とで時期差があることが確認された。

### (2) 水路と石垣

谷の中央付近から東よりに貫流している水路とその東側にある道跡にトレンチ2基を設定し掘り下げた。

トレンチ内の建物平坦面側（南西側）に位置する面について底面の検出を行ったところ、第1トレンチでは上面の掘形より70cm下がったところで、水路側に45cmせり出す形で石積みが検出された。

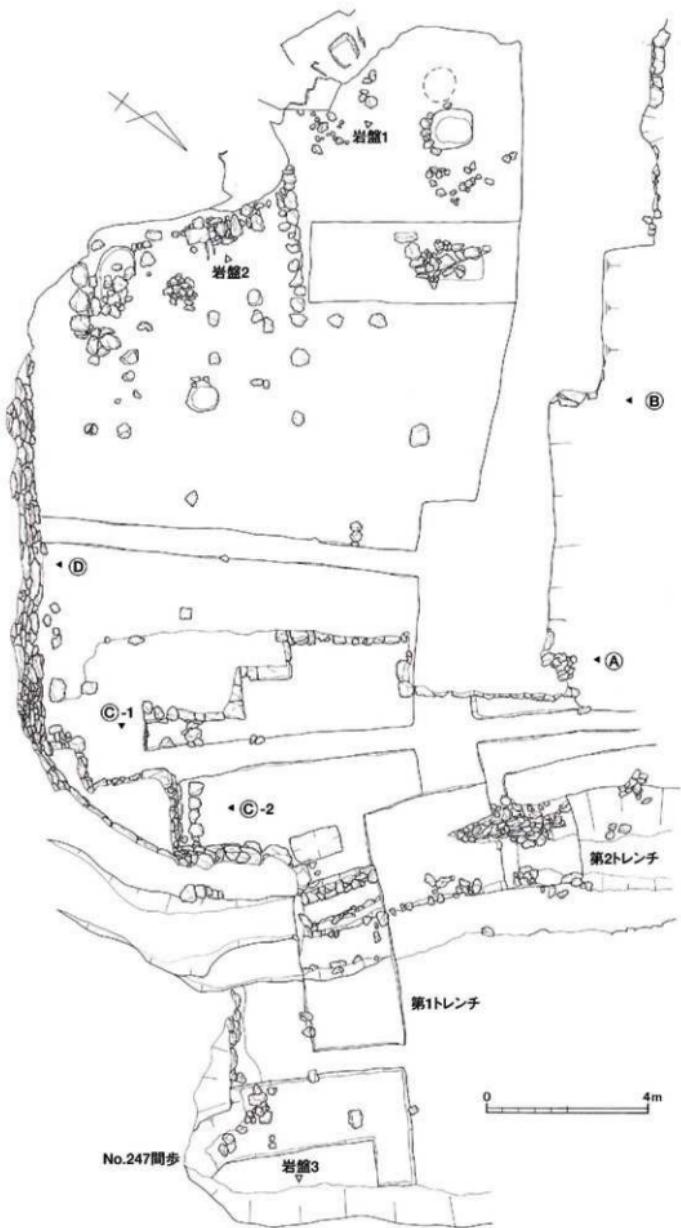
第2トレンチでは、建物平坦面側（南西側）には石垣が位置しており、この石垣の底面を石に沿って掘り込み、水路底面の確認を試みた。

平坦面の端部となる石垣上場から140cm下がったところで、石垣上部と下部との間に明瞭な構築の差が見られた。

下部の石垣は上部の石垣に対して平面の差で10cm程度水路側にせり出して石垣の面を形成している状況であった。

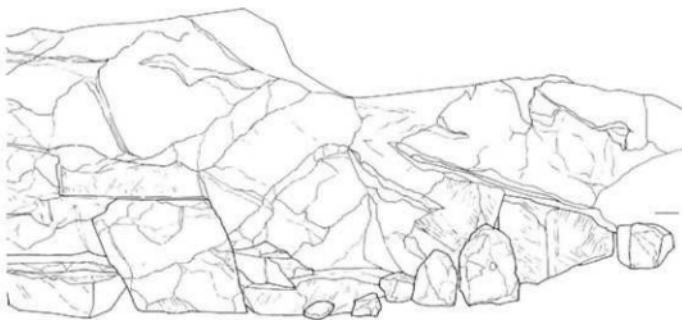
このことから、水路に対する建物平坦面側の石垣は、2段に積まれていたと判断された。

また、第1トレンチのNo.247間歩側のトレンチ壁面は、上面に石列を配し、以下やや締まりのない黒色土が見られた。さらに間歩側に向けて同様の石列が2列検出され、水路修復の痕跡と見られた。間歩前では表土下20cmで粘土の堅く締まった面を確認したが、礎石や柱穴は検出されなかった。



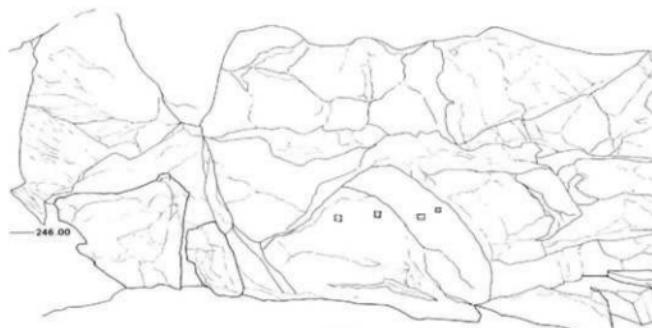
第23図 出土谷II区平面図 ( $S = 1/120$ )

— 249.00m —



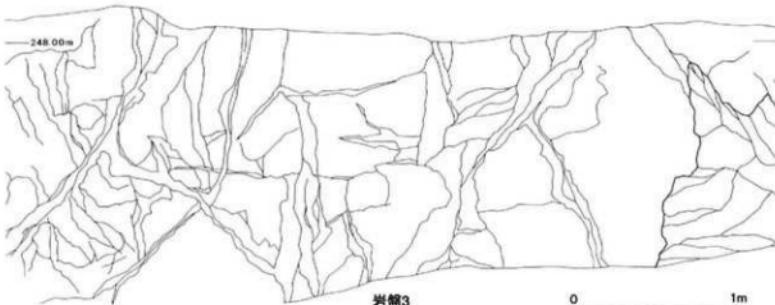
岩盤1

— 249.00m —



岩盤2

0 2m



第24図 出土谷Ⅱ区岩盤実測図 ( $S = 1/60 \cdot 1/30$ )

— 245.00m —



石垣 A

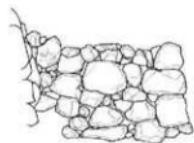


— 245.00m —



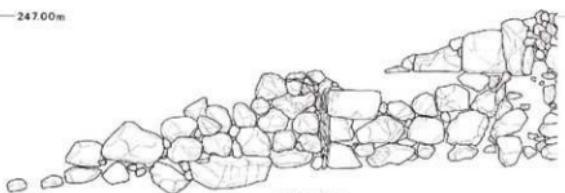
石垣 B

— 247.00m —



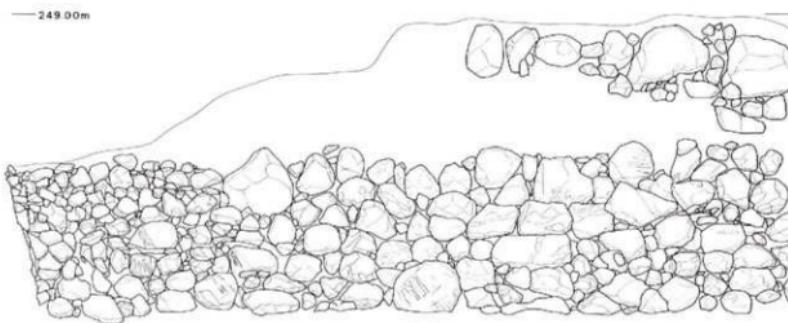
石垣 C-2

— 247.00m —



石垣 C-1

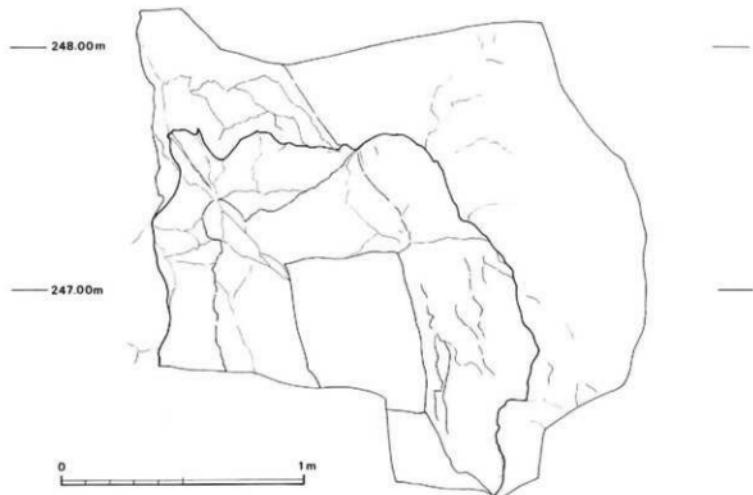
— 249.00m —



石垣 D

0 2m

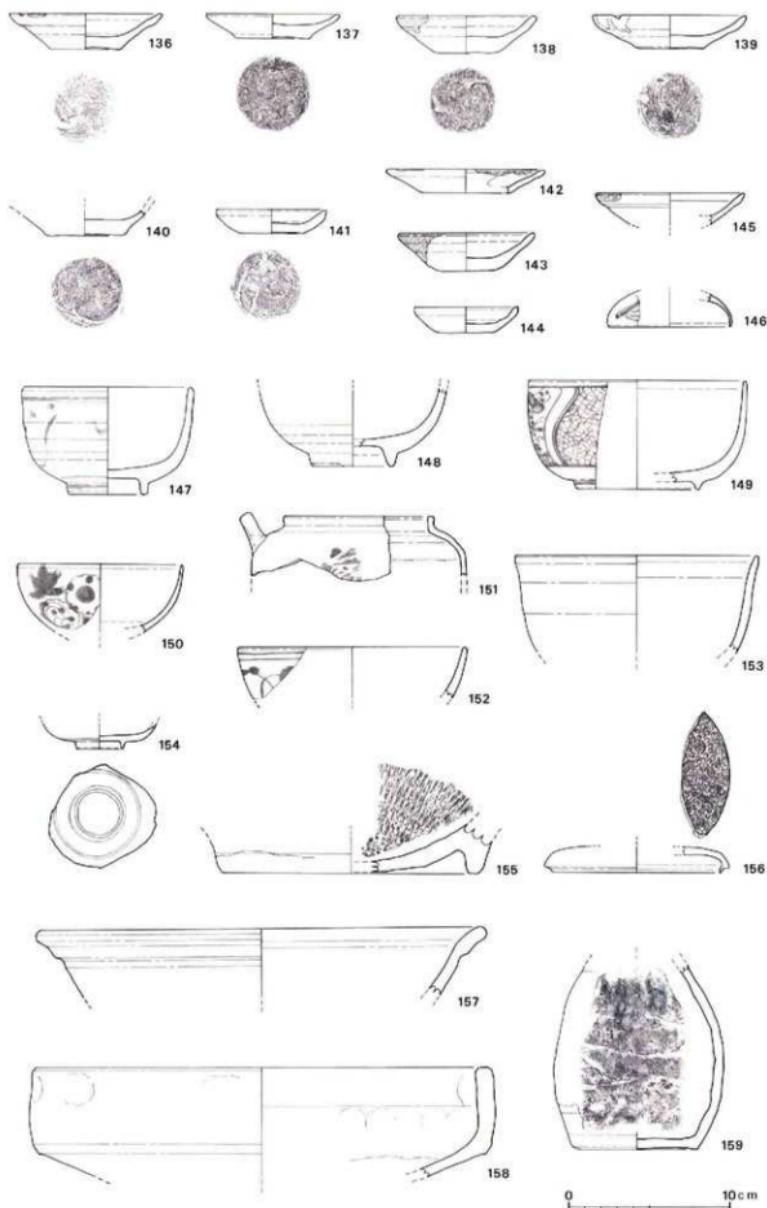
第25図 出土谷Ⅱ区石垣実測図 ( $S = 1/60$ )



第26図 No.247間歩実測図 (S = 1/20)

井戸番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
136	遺構検出面	土師器	灯明皿	(9.4)	2.1	4.2	赤褐色	煤付着	反転復元
137	遺構検出面	土師器	灯明皿	(8.6)	2.3	4.5	淡褐色	煤付着	
138	遺構検出面	土師器	灯明皿	(8.6)	2.3	4	褐色	煤付着	反転復元
139	遺構検出面	土師器	灯明皿	9.5	2.1	4.4	褐色		
140	遺構検出面	土師器	小皿			(4.7)	褐色		反転復元
141	遺構検出面	土師器	灯明皿	6.3	1.5	3.9	黒褐色	煤付着	
142	遺構検出面	土師器	灯明皿	(8.0)	1.5	(5.6)	濃褐色	煤付着	反転復元
143	遺構検出面	土師器	灯明皿	(8.2)	2.4	(3.2)	褐色	回転角切り 煤付着	反転復元
144	遺構検出面	土師器	皿	(6.4)	1.6	(3.6)	明茶褐色		反転復元
145	遺構検出面	土師器	灯明皿	(5.1)			赤褐色	煤付着	反転復元
146	II区床面	肥前系陶器	蓋	(7.5)			透明釉		反転復元
147	遺構検出面	肥前系磁器	碗	(10.6)	6.6	(4.8)	淡灰色	削出し高台、トチノ 根、貫入	反転復元
148	遺構検出面	肥前系磁器	碗			(5.0)	灰釉:淡灰色	高台盤付砂目付着	波佐見 反転復元
149	II区精査中	肥前系磁器	碗	(13.6)	6.7	(7.4)	透明釉		反転復元
150	遺構検出面	肥前系磁器	碗	(10.0)			透明釉		反転復元
151	II区臼周辺	石見焼	土瓶	(9.4)			透明釉	外面刷部「蔵」	反転復元
152	調査区内	肥前系磁器	碗	(14.0)			透明釉		波佐見 反転復元
153	遺構検出面	肥前系磁器	碗	(15.0)			長石釉		反転復元
154	遺構検出面	磁器				2.8	透明釉		
155	遺構検出面	備前系陶器	擂鉢			(15.6)	透明釉		反転復元
156	II区臼周辺	小谷	蓋			(10.3)	透明釉	唐草文	反転復元
157	II区精査中	備前系陶器	擂鉢	(27.2)			鐵輪:濃褐色		反転復元
158	遺構検出面	土製品		(28.4)			濃茶褐色	煤付着	反転復元
159	II区南崩落土	肥前系磁器	瓶			7.4	(内)灰輪:淡黄色 (外)灰輪:淡绿色		17C前半

第6表 出土谷II区出土遺物観察表



第27図 出土谷II区出土遺物実測図 (S = 1/3)

## 第6章 調査のまとめと課題

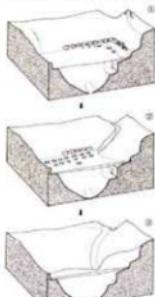
### 第1節 於紅ヶ谷地区

今回調査を実施した下層確認部分では、岩盤加工遺構と周辺の遺構面との関連から於紅ヶ谷地区的土地変遷の一端を窺えた。

また、石垣の調査では、石垣の高さが5mを超えて、2段積みで、小テラスを低位の石垣の上面に確認できることなどから、於紅ヶ谷地区的石垣を伴う造成が一平坦地とは断定できないという可能性も指摘された。

しかし、これまでの調査で、中央部の断ち割りによって厚さ2m以上の整地層が検出されており、さらに前述のように石垣が5mを超える高さであるため、下層確認は今次調査に止めておくこととなった。

遺構の変遷を想定したものが第30図である。



第28図 於紅ヶ谷地区変遷模式図

最下層を仮定すると、上面には建物跡を伴う遺構面が2面存在し、上段の石垣を構築した年代がおおむね1600年頃であること。その後、土砂、ズリによる堆積土盛りが築かれ、その間を道として利用していた状況が想定される。

採掘では、No.49間歩前に設定したトレンドの調査等から、以下のことが確認された。

第1点は、岩盤に残る工具痕である。岩盤に残る工具痕は2種類あり、鑿の痕跡を明瞭に残す側に鉛脈が位置しているため、粗い工具痕が採掘痕であることが想定された。

岩盤に対する堆積土の状況と出土遺物から、工具痕の年代が近世初頭と考えられ、当時の採掘の実際を窺い知る資料となった。

具体的には、露頭からの縦（上下）方向への採掘と、ひ押し坑道としての前方方向への採掘の痕跡が確認された。

第2点は、「採鉱」と「採掘」の相違の可能性である。昨年度までに調査されたNo.267間歩は、水平な地表面から採掘が試みられた間歩で、岩盤の掘削がわずか1.4mで終えられた状態であった。

No.267間歩では、鉛脈が、矩形の間歩入り口のほぼ中央に位置するように開削されていた。この間歩の推定される年代は、17世紀後半以降と考えられており、於紅ヶ谷地区的遺構の中では新しく、当初に露頭掘されていた岩盤に対して「再採掘」を行ったと考えている。矩形の入り口に対して中央に鉛脈が位置している特徴は、他に斜面上位に位置しているNo.268間歩にも見られる。

このNo.268間歩も斜面から平坦面にかけてズリ堆積が認められ、平坦面建物跡よりも新しい遺構と見られる。坑道内の状況は入り口で観察したところ、入り口付近から坑内約1~2mのまでは矩形であるが、その先で上下に採掘域を広げている状況で、掘り止めたNo.267間歩とは対照的である。

また、このことに加えて、No.267、268間歩と、先に述べたNo.49間歩における鉛脈の位置と採掘痕を比較すると、矩形の坑口である他に、「坑」に対しての鉛脈の位置に相違が見られる。

すなわち、No.49間歩周辺の採掘は、鉛脈の位置が「坑」の左右いずれかに位置していることになるが、No.267、268間歩は、「坑」の中央に鉛脈が位置している。

つまり、No.267、268間歩の採掘方法が、採鉱を前提にして開削され、その後に採掘された

可能性である。

中央に鉱脈を置いて、入り口付近からわずかの範囲に対してのみ矩形に掘り進むことは、運上入札に係る試算に供された可能性が考えられるのである。

勿論、他の矩形の間歩やひ押し間歩でこのような開削方法が一般的であるのかについては、今後の検討事項である。採掘痕の相違などにも留意した調査が求められる。

## 第2節 竹田地区

### 【I区】

下層確認トレンチで検出された「方形炉」であるSX14のより具体的な情報を得ることができた。

SX14の掘り下げの過程で、3基の炉跡が構築される順序と、そのたびに小規模な整地を施し、炉を囲っていた粘土を壊して、再度黄色粘土を充填、新しい炉が構築された状況を観察した。その結果として、白色片を包含した黒色炭化物層が炉周辺に広がっていたと判断された。そして、炉跡周辺に柱穴が確認され、建物跡の一部にが設けられていることを確認した。

方形炉の面より下層では以下のことが覗えた。「地山」と判断していた遺構面より下層は、トレンチ北端の断ち割りによって、遺構面と考えられる整地面が2層あり、その下は盛り土である灰黒色層が約1m堆積している状況であった。上面の整地面からは遺物が採取されたが、小範囲のため灰黒色層からの遺物がなく、時代の特定は困難であるが、第4面よりも下層に遺構面と盛り土がある事実が確認された。

### 【IV区】

IV区に設定したトレンチ中程の製錬遺構が集中している場所から鉄鍋片が出土した。周辺の状況から製錬作業に用いられた鉄鍋炉の可能性があり、そうであれば2例目である。

今後、科学分析の詳細な結果をまつことになる。

### 【V区】

今回のV区の調査によって、造成作業が行われた場所でも、建物跡などの遺構が確認できない部分が確認された。

製錬遺構の集中するIV区とV区の地形を比較してみると、IV区の平坦面が、ほぼ水平を指向することに対して、V区は盛り土によって尾根上から尾根先端へ緩斜面となっていた。

また、V区の西よりの箇所は、不定型な崖地状の地形を確認し、人為的に掘削されたことが窺えた。この付近の地山は黄色粘土であり、何らかの採土跡などとも想起されるところである。この問題は今後の検討課題としておきたい。

いずれにしてもこの地区的調査によって、仙ノ山山頂の遺構群を検討する上で、特に平坦地の利用状況と、盛土、整地の様相が確認された。このV区の調査をもって、竹田地区の平坦地群の調査をひとまず終えるとした。

## 結び

石見銀山遺跡の考古学的調査は、銀山400年の歴史の各時代相における銀生産の具体化と再構成が一つの目的である。

今次の発掘調査からも一定の解釈を試みたが、今後、調査結果を累積させることにより、銀生産とそれを取り巻く人間活動の実際について、より正確な再構成がなされることとなる。

石見銀山遺跡は、これまでの発掘調査から面的な広がりと時代的な幅をもち、遺存状態が良好な遺跡であることが明確になった。今後は、遺跡の解明と保存の両面からより計画的に調査を実施することが必要であり、また、調査成果を公開、共有していくための方策が求められるところである。

---

## 参考引用文献

- 島根県教育委員会・大田市教育委員会他『石見銀山遺跡総合調査報告書』Ⅰ 1999
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』9~12 1998~2002
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』1~8 1981 1989~1994 1997~1998
- 島根県教育委員会『石見銀山論集』2002
- 島根県教育委員会『石見銀山関係編年史料綱目』2002
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡宮の前地区現地説明会資料』2002
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡科学調査報告書』2002
- 国立科学博物館『日本の鉱山文化』絵図が語る暮らしと技術 1996
- 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000
- 山根 俊久『石見銀山に関する研究』鹿川書店 1932
- 葉賀七三男『冶金考古学のすすめ』『金属』1991~1993
- 井澤 英二『石見銀山の地質と鉱物について』『日本鉱業史研究』No.35 日本鉱業史研究会 1998
- 植田 晃一『灰吹法の伝来について』『国際金屬歴史会議しまね』1997
- 植田 晃一『16世紀初頭の李氏朝鮮端川銀山の灰吹法と石見銀山への伝来について』  
『日本鉱業史研究』No.35 日本鉱業史研究会 1998
- 藤澤 良裕『瀬戸美濃大窯の編年』『瀬戸市史 陶磁史篇 四』1993
- 森 肇『秀吉期城郭出土の土器・陶磁器』『土器・陶器からみた織豊期城郭』1999
- 村上 隆『日本の美術4』No.443 金工技術 至文堂 2003
- 村上 伸之『肥前における初期の陶器生産に関する考察－主として地域差の問題を中心に－』  
『研究紀要 第6号』有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 1997
- 注：本書観察表に用いた肥前陶器の分類は村上1997による。